

# 川柳塔

昭和五十四年七月二十五日印刷  
昭和五十五年一月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷六三三二号



日川協加盟

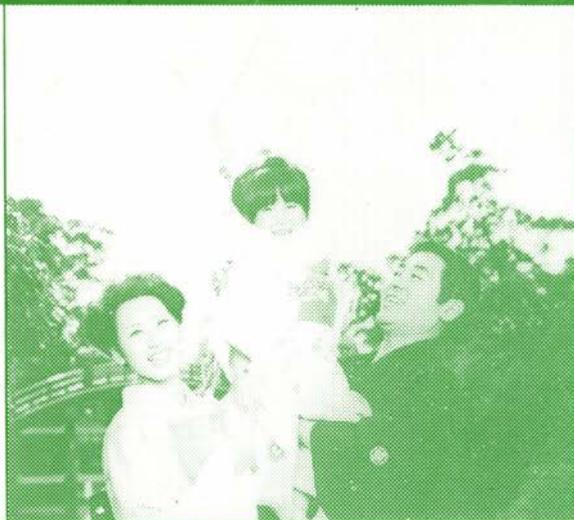
No. 632

同人特集・私の一句

一月号

南海沿線の

# 初詣



住吉大社  
高野観音  
山

お問合せは  
南海国際旅行



南海電鉄

■なんば641-8686

■梅田311-5038 ■天王寺623-1641

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ  
**豚饅・焼餃子**  
しゅうまい ちゃあしゅうまん  
**焼売・叉焼饅**

大阪・なんば



TEL (64) 0551

〈支店・出張店〉

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋  
中之島サン・ストア なんば新田店・新川売店 ドーゾマ地下支店  
ミナミ 地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア  
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

## 謹賀新年

ここ数年、経済問題は勿論、社会情勢全般に亘り、日本の各階層の中で、構造的に、或は制度的に根強い変化をかもし出して居る。その最中に、不肖が第二代目の日川協理事長をおおせつかった事は、文字通りに全身がひきしまる思いで一ぱいである。着実な成長と確固たる親和を基として、柳人層の老齢化の防止、吟社運営の困難事情増大等々、問題は極めてきびしい。こんな時機に於いて、その対応を的確に保持する努力こそ、今日の日川

協に課せられた大きな責務である。そのためには全国加盟柳社は一致協力、各吟社が切磋琢磨、向上を計ることは言うをまたず、相互の連繫に絶対的強靱を期せねばならぬ。就中、わが「川柳塔」一同は他の盟友各社と共に一層の緊禪一番を要求せられて居ることは自明の事である。

この新しい年頭にあたり、明るく豊かな、光りを求め、川柳の道を確認樹立してゆきたいと心から祈念してやまないものである。

運命線の手相も歳あらたまる  
光り求め新春らしく貧と居る  
妙に高鳴る年齢となる宝くじ  
とにかくめでたく越年をして深呼吸  
弱さは見せずせめて明るく夕焼ける

中島生々庵

川柳塔新年号

座右の句

凡聖一如元旦のこころしる

(路郎)

私の句

解脱する心 観音の名を唱え

森下愛論

# 川柳塔 新年号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

謹賀新年

中島生々庵 (1)

人との出会い

正本水客 (2)

新年所感

中島生々庵 (4)

誹風柳多留廿五篇研究

(二七丁)

(30)

川柳塔 (同人作品)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗  
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

若本多久志選 (6)

水煙抄

川村好郎選 (40)

年賀状

西尾 葉 (26)

柳多留お目見得

(川柳太平記②)

東野 大八 (28)

秀句鑑賞

(同人吟)

菊沢小松園 (25)

愛染帖

(水煙抄)

香川 醉々 (53)

川柳と人形劇と (3) — 随想風に

橘高薫風選 (50)  
山村 祐 (54)

## 人との出会い

正本水客

曾て路郎先生は旅に出るときには、人との出会いを楽しみにして行くと言われたが、私は自然との出会いを楽しみにして旅に出る。しかし旅でふと出会った人との心の交流は忘れ得ない思い出を残して呉れる。

木葉もすっかり落ちつくして樹々は新しい年を迎える心構えをしている季節であった。

九州の東北部にコブのように突出した国東半島(くにさき)六郷満山と総称され、独特の文化のなかに石仏石塔が散在している。

私の旅の第一日は宇佐八幡から両子寺へ。二日目は富木寺から熊野の大磨崖仏を廻って今夜の宿は極楽寺である。本堂よこの客殿に

泊めて戴く。夕食には食べきれない程の郷土料理が並んで吃驚した。食後、明日のコースの研究をしましょと住職が小さな机を持ってこられた。ズツと前からの知合いのような

飾らない態度が心に残る。翌朝、地元の学校に教鞭をとっておられる住職は出勤前いつもより一時間も早く寺を出て走水峠の下まで車で送って戴く、手を振って戻って行かれる笑顔が何時までも私の眼の中に残った。

私の一句……(同人特集)

「夫婦」の読後感……

「熊野」発刊におもつ……

書評・遍歴……

一分間の柳論……

雅号ぶっちゃげばなし

アノ梅の記……

初歩教室……

大萬川柳「区切り」……

柳界展望……

本社十二月句会……

各地柳壇(佳句地10選)……

「年賀ハガキ」……

一路集「運勢」……

「猿」……

東野 大八 …… (32)

菊沢小松園 …… (56)

高杉 鬼遊 …… (58)

香川 酔々 …… (48)

中村ゆきを …… (63)

香川 亜成 …… (59)

不二田 一三夫 …… (59)

本田恵二朗 …… (62)

川村好郎選 …… (64)

(庸佑・整理) …… (80)

河野君子選 …… (84)

高橋千万里選 …… (60)

谷 真風選 …… (60)

白井三林坊選 …… (61)

(一三夫・葉子) …… (91)

座右の句

満でよし数えでもよし日々新

私の句

音絶えて哀しきままに慣れし日々

北野 久子

(好郎)

国東町から今日の目的地、文珠仙寺へは一

日一本のバスしかない。峨々たる岩峰が連な

る山懐、苔むした石段を登り詰めた処に寺は

あった。広い境内を任職の案内で廻る。夕食

は庫裡で御一緒にと任職夫妻と三人、同じ食

卓で献立も全く同じである。すっかり身内の

者のような雰囲気まで夜遅くまで四方山の話が

弾んだ。御息息が外の寺へ修行に出ておられ

るとか。息子が使っていたんですが、作り方

が分らないので貰方いれて下さいますかと、

ネスカフェーの瓶を持って来られた。蓋を取

ってみると少し湿って固まっているが、何か

暖かいものが込みあげて来て嬉しかった。

朝 国東最大といわれる本堂前の国東塔と

御夫妻に見送られて、一番のバスに乗るべく

7キロほど下のみじ橋まで山を下って行っ

た。バスの時間までを近くの石仏をのぞいた

帰り、植木の美しい家の前を掃いていた奥様

らしい人から、バスはまだ来ませんから這入

ってお休みなさいと声を掛けられて、出され

た熱い紅茶は見知らぬ旅人に対する思遣りが

暖かく喉を通っていった。その夜は周防灘に

面した香々地まで出て、極楽寺さんから電話

して貰っておいた梅乃屋という小じんまりし

た宿に到着した。玄関から部屋へ通じる廊下

の下はガラス張りの海水をひいた水槽になっ

ていて、食べる直前に取り出して料理にする

訳だから鮮度は抜群、三日間続いたお精進に

終止符を打って別注の車エビの塩焼との出会

いを私はゆっくり楽しんだ。

# 新年所感

中島生々庵

'80 頌春

昨年は誰いうとなく、80年代という言葉が世界中に拡がって行つて、これという理由もなく緊張感にせまられた歳であつたが、愈々その80年代を迎える昭和五十五年である。型どおりに先ずもつて、明けましてお芽出度うございます。昭和54年度といへば、未歳といふおだやかなイメージと反対に、いろいろとマスコミの話題になることの多い歳であつた。年末から正月にかけて、江川問題、植村直巳氏の単独で北極点突入、七月には英国で世界最初の「試験管ベビー」誕生、隣国大統領の銃殺事件に続いて秋頃からは世界動乱などとおだやかならざる流説を生むようなイラン問題、かぞえ切れない騒々しきで、問題の80年代に突入という事である。大きな流れとあつては個の力の非力は如何とも対応し得ない感じである。人間の先祖が地球上に発生したのは50万年前ということを知っているが、人間の英智ほどの位変り、どこまで進歩しているのだろうか。私達の周囲は一寸顧みただけでも、衣食住百般に不自然極まる生活の連続である。それにも拘らず、平均寿命はどんどのびて、われわれ日本人だけで言つても、この30年間で男女とも20年以上寿命がのびた。

この長寿というのは一見喜ぶべき現象に違いないが無条件に、あわてて喜んでばかりも

'80 頌春

中島 生々庵

西尾 栞

若本 多久志

川村 好郎

菊沢 小松園

正本 水客

橘高 薫風

参事 一同

常任理事 一同

いられぬ気がする。それは経済が高度に成長した結果、現代の青少年がすぐ骨折を起したり、心臓麻痺を起したりし易い事実を注目するとわかるからである。又こうした肉體上のことばかりでなく、世上マスコミ紙上を賑わしている、あのいまわしい非行は、親子関係問題は、登校拒否の子どもが激増するのは、こうした世相はどうなっているのだろうか。

児童心理学、宗教、教育等々一生懸命に対応策を研究されていることは勿論であるが、だんだん波紋が低年齢に及んでゆく傾向は極めて寒心すべき問題である。一方、子供は大人の鏡であるとの説も、うなずかれる点が多いことも拒めないとすれば、大人の生きざまというか、社会で人間が生きて行く上で、かくあるべき姿とでも言うものを、大人は自らの上にかきよく求めなくてはならないということとなる。その一番基となるものは家庭生活ではないだろうか。或る新聞で見たことだが「お前なんか親じゃない。親らしくして見い」と言いはなち、親に暴力をふるう子供」が多いとなれば、家庭生活の中の父親、母親は何かという問題が緊急な問題になってくる。むずかしい問題である。

私は、なぜ正月早々こんな問題を、くどく申すかというところ、現在の青少年がやがては大人の域に成長して行った時——即ち10年か20年たった時代の川柳はどうなっているだろうかと、寒い想像をするからである。又しても「俺に似よ俺に似るなと子を思い」の句が頭の中を、するどく突っはしるのである。川柳人としての私は道学者でもなく、禪の大悟道者でもない。それでいい。ただ感謝と満足の合掌による充実した日暮らしをもって、川柳を通して一隅をてらす心構えを忘れないようにしたいのである。

私は毎月3日京都の西大谷本願に詣る。53年12月3日は日曜日だった。空は爽やかに晴れ上がって静かだった。本堂の前の掲示板に次のように書かれてあった。

朝、はりきって出かける事も大切だが、

夕、充実した気持ちでいそいそと家路をたどれるような人生でありたい。

本年もどうぞよろしく、ご指導とご厚誼を。

—— ビタミン ——  
肉体疲労時のVB<sub>12</sub>補給に

**アリナミン<sup>®</sup>A**

アリナミンA25の機能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB<sub>12</sub>補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。



武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

理事	一
運営部	一
句会部	一
編集部	一
同	同
同	同
同	同
同	同



若本多久志選

高槻市 若柳潮花

秋茄子が転がつている土間の冷え

あめ煮にされても稚鮎湖を恋い

誰の喪か女は黒を派手に着る

妬く妻が居て円満な灯がともり

不渡りを握らせたまま除夜を聞く

大阪市 中川滋雀

天高く孤高の窓が貧しすぎ

雑念に負ける写経が重くなる

金と暇ある長生きも愚痴が出る

条件をのんだしこりの判を押し

働いて身を粉にしたとは偽われぬ

宝塚市 傍島静馬

金づると見たか一役持たされる

長電話指でそこらを書きなぐり

使い途聞くだけきいて貸し渡し

筆不精手紙離れに輪がかかり  
焦るほどもつれる足に老いを知る

堺市 藤井一二三

アルバムに涙 秋の夜が更け

人並みの生活へこも汗をかき

ねぎらいも受けず紅葉散りいそぎ

入院二日もう病人の顔になり

絶食の検査つづきで重うなり

出雲市 原独仙

おい居るか居るぞ上れで酒となる

隔世遺伝 俺そっくりが居て愉快

台所音を殺して飲む寝酒

金釘流されど賀状の書ける幸

総入歯横でバリバリ噛む若さ

大阪市 江城修史

偏見の軽い言葉が傷つける

親と子に所詮別れがあるホーム  
踏めばなる枯葉の叫び世の音か  
子に賭ける夢ある限り春遠い  
執念の命継ぎ足す除夜の鐘

青森市 工藤 甲吉

金のことなどは頼まぬ初詣  
死に体という宰相のなさけなさ  
越し方の山・谷・川は皆きびし  
人が人恋う日を雁の列がゆく  
ふるさとの恩を忘れず鮭帰る

兵庫県 遠山 可住

思いやりの歩調合わせた寺の秋  
偽りの色口紅を濃ゆく引く  
灯を消して虫の音色の中に寝る  
巢をかけて蜘蛛絶対の自信持ち  
しぶ柿に最後の秋がしがみつ

倉敷市 藤井 春日

長いものに巻かれる悟など持たず  
困者と知れる構えの昼三味線  
ミシン踏みリズムは母の子守唄  
四季毎の掙自然に嘘は無い  
相愛の二人悲歌奏でて

今治市 月原 宵明

ぬぎ捨てた靴の個性も子沢山  
潮騒が女の業に火をつける

人妻としての油断をかいま見る  
逢うて来た余韻ブラウス揺れている  
よく働く男のボタン一つとれ

大阪市 川口 弘生

日曜日猫も朝食抜かされる  
医者の子に生れて医者をあわれとみ  
垂れ給う仏の御手の慈悲を知る  
並べられて知る追う者の底力  
日の丸に換える国旗のない誇り

米子市 八木 千代

野仏を囲んで低く咲く野菊  
氷河ふと愛に流れてみたくなり  
正念場の夫へ内助も走り出し  
深呼吸してウナ電と対決す  
子の凧の高さへ糸のありつたけ

米子市 増田 竹馬

三もんの得財布を拾うた朝  
暖房の茶の間に写る水着ショー  
末っ子と孫が同じ日に生まれ  
真心という一と味がきく料理  
井戸水の温みに秋の深さ知る

西宮市 藤村 女

城持たぬ夫婦で気らかな旅とする  
炎えつきたグラスの底にあった思慕  
エプロンがやっとはずせた除夜の鐘

日記帖だけ真白でスタートし  
かげりなき心豊かな初春の膳

米子市 林 瑞 枝

ふたり行く山はオゾンを惜しみなく  
かすがいの子が糸引いて居る別居

花を追う蜂の心に住む故郷

底知れぬ謎を明治の皺に秘め  
また安値野菜哀歌の鍬を振る

大阪市 金 井 文 秋

血圧を葉でなだめなだめ生き  
ずばらな家で風鈴が四季を鳴る

観察をする眼は炎える目ではない  
切り抜ける手がどたん場でやっとなる

貫禄はとばける事も板につき

松江市 恒 松 叮 紅

晩酌へ妻の意見が通る齡  
落ち目なら庭の盆栽までも枯れ

幸せな人がゆっくり煙草喫う  
善人の夫で小さい灯をともし

無職にも小さい夢がある明日

大阪市 山 川 阿 茶

死ぬのを待たれているようなアイバンク  
心臓としばし対話の聴診器

秋深し散る紅葉にも美と醜と

あれこれと自分の病気に迷う医者

不整脈へ開らきなおっているも医者

大阪市 河 野 君 子

逆らえば流しの水さえ渦の音  
コビーしておきたい手本の友がいる

病み上り和服にはずんでみたとても  
心の中に逃げ道ばかり開けてある

萩の寺女の業を埋めにゆく

高根県 堀 江 正 朗

盃を置けば明日に続く幸  
小さいけど僕力もある動き

もの想うとき冬になる雨の音  
この雨が雪に変わるか鍋かこむ

手に触れるだけの暮らしの温かさ

岸和田市 高 橋 操 子

コスモスと対話台風まともらし  
ハンドバッグあれこれ菜巾をとり

生きているよろこび旅を無事帰る  
台風へ新築のミス二、三カ所

正月の湯気字窓の孫帰る

竹原市 森 井 菁 居

出来損いの茶器が無性に手放せぬ  
厚物の菊造られた憂い持つ

青年の家に甘えをしごかれる  
善人の日記出合いがみな嬉し

夕焼けの中で明日の地図を描く

感激は流れて沈む胸の底

島根県 堀江芳子

子の背丈理屈は抜きで折れておく

このへんでもう寝てほしい酔い機嫌

善意入れ違つて視点うずくまる

満点でなくても夫はほめてくれ

神戸市 中村 ゆきを

児童年言葉が欲しい知恵おくれ

祝膳の真ん中にいる母の顔

一本の道しか知らぬ背を伸ばし

いたわりも欲しやその名は経営者

草野球ライトへ専務かり出され

八尾市 高杉 鬼遊

大臣が誰になろうと雑煮箸

川村好郎先生の喜寿を祝う

どんぐりの大樹が伸びる喜の祝

身障の寄付を嫌やがる門構え

戦争をするかも知れぬ石油缶

米櫃の底に奇蹟がありそうな

姫路市 植村 客遊子

御老体だから毒舌聞いておく

喜びも酒悲しみもグイといく

振り袖も走れ走れと発車ベル

孫連れて運動会で走らされ

鳥焼いて山の男の血がたぎる

朝刊に金剛山は雪景色

富田林市 板尾 岳人

御来迎一番バスで行く男

句碑建立金剛山から八尾が見え

おめでとう母の袂に雪がある

五〇〇回登ると山は低くなる

大阪市 大坂 彤水

八十年代は女がタクト振る

八十年代もサラ金増えるだろう

八十年代は八十年代の絵をかくさ

取る方と取られる方の見解差

ちよい借りをしていた金を思い出す

大阪市 不二田 一三夫

天国へキリストVS仏さま

遺句集が届く 奥さんの筆跡で

ドミノスタイルで倒産する凄さ

万引きを誘ったスパーパーが憎い

金すこし出来たか喧嘩しなくなり

尼崎市 黒川 紫香

湖の広さひとり言してみたく

つかまえた蟹の涙も泡になる

亡妻が居らぬ旅路は風が吹く

落銀杏たまって冬の音が来る

西宮市 島居 百酒

辞を低く迎える裏にある打算

老残の悔悟へ応えず雲走る  
いつの日か家風にとけた座の温くみ  
お隣もひっそり秋を深うする

倉敷市 野田素身郎

場違いのようだが軍歌しか知らず

平和公園原爆知らぬ娘の笑声

思いもかけぬ闇から金木犀香る

空想を楽しんでいる一人旅

八尾市 香川酔々

ふるさとの土蔵の鍵は放せない

忘れ得ぬ手形が残る故郷の地図

妹と別れた銀杏散る舗道

一匹の蟹が泣く末世とか

堺市 高橋千万子

松茸を一切たべて秋終る

受け取れば温みつたわる裸銭

浮草の巻き込まれずに渦の外

酒やめてから人間が小さくなり

守口市 野呂右近

決断を迫る子の知恵妻の知恵

廃業の日のシャッターの音うつろ

肩章も無し無職です軽い肩

三十年吊したのれんたたむ妻

神戸市 仲 どんたく

胴上げを敗軍の将背まで聞き

自然の法則香煙の客となり  
皺埋めて今日も鴛鴦ちんどん屋  
玉三郎女を煎じつめて見せ

岡山県 嘉数千代香

まっすぐに歩けと背を押す白い風

心の灯消してはならぬ日の氷雨

語り合う絆も切れた冬木立

あきらめた心へ新春の鈴が鳴る

倉敷市 水粉千翁

ときめきの涙に透ける頬の艶

子のうわさまん中にしてお茶の味

束ね髪きりくらしの艶がしみ

よろこびを拾うたように夫婦老い

呉市 林野甦光

泥墨の個性を絵筆春にする

スピードの錯覚にいるニューフェース

童心に母の痛みが分りかけ

切札のない勝負師と言う末路

鳥取市 両川洋々

句碑の字の丸さへ茗人生きている

豊満な胸にきれいな嘘が棲み

秋風にああ落選のピラが鳴り

逢えば崩れるそんな理性を抱いて逢い

福原市 岩井本蔭棒

お願いを申し度いのは有権者

当節は犬さえ残す米のめし  
アルバムで短かい春が笑つてる  
母のしわ一つ一つに叱られる

富田林市 岩田美代

動かない時計がひとつ秋静止  
時雨する秋の奥嵯峨ひとり占め  
ユニークな案山子でからすと話してる  
八方美人の孤独な顔を見てしまい

東大阪市 市場 没食子

陣頭に立つ性でなし兵でよし  
生れたのがそも災危の始り  
生と死の矛盾の中の生き甲斐よ  
ドツと来た拍手台本にない台詞

桜井市 岩本雀踊子

裏切れぬていどの距離を保つとく  
百舌鳥の鳴く裏庭にもある秋の色  
臍の緒に申し訳けない無職なり  
人妻と云う名の重い影をもつ

大田市 藤田軒太楼

実直な口下手万年倉庫番  
大安の縁起を親に強いられる  
覺つけた示談が痛む後遺症  
耳うちの甘言寝た子起こされる

伊丹市 榎谷寿馬  
行きずりの飲み屋におでんやわらかし

決心の禁酒を擲りにくる梅酒  
上棟式若いコップの木遣り節  
大物を逃して夜釣酒とする

松江市 中川晃男

オレンジ色の太陽が墮ちる都会の海  
余生同士の人間不信とは佗びし  
佗びしゆうて哀しゆうて涙さえ出ず  
闇に沈む頭脳うつろああスランブ

和歌山市 垂井千寿子

母の死三句

亡母の無い部屋の広さへ寒く座す  
あつけない死 亡母の呼び鈴こわく見る  
振り向けばいつでも亡母が居てくれた  
七五三親馬鹿で良し秋日和

大阪市 欄 蘭

義理堅く台風毎年やって来る  
女医さんも時には厳しい目付きする  
初詣で吉のみくじがそらざらし  
いささかの屠蘇にも老父は少し酔い

今治市 長野文庫

うまそうに素うどん食べるメロドラマ  
速達ですと横柄なヘルメット  
鐘ついて賽銭投げて安堵する  
車座になつても順をつけたがり

島根県 藤井明朗

人生の峠へのち大事にす

秋が好きひとり絵筆の旅を行く

凡人に戻るわが果へいそぐラツシユ

善人をだます七色の顔をする

島根県

梅 みどり

山峡のみみじに生きる亡夫の思慕

真白に私の心洗いあげ

スープレ皿あため夜の平和くる

生きている燃えている心の詩がある

鳥取県

鈴 木 村 諷 子

ある愉悅乳房の淵へおぼれんか

わが娘ふたりになってやって来る

金婚自祝

五十年同行二人遍路笠

敷かれたり敷いたりいつか金婚へ

島根県

小 砂 白 汀

冷と暖父はほどよく使いわけ

風化したテーマは土へ還えそうよ

夫婦にも間のとりようの要る会話

くりかえす霧笛は海のしやくり泣き

大阪府

室 谷 徹 舟

今年こそ三猿主義と云う決意

幸せと聞けば一筋熱いもの

その昔トイレの故障なかつたに

まき餌には弱い政治家針を呑み

姫路市 大原葉香

老妻に教わり孫のおむつ替え

柿食えば秋だ秋だと歯が答え

釘さびて尚も一家を支えてる

太陽の恵み節穴のがさない

島根県

西村早苗

真実が話せる縄のれんに居る

反論は角に坐わつてる髭男

ほそぼそと己に聞かすいろり焚く

人信じかねて落葉をかき集め

川西市

戸田古方

おちついておちついてスカタンしていたり

川霧に今朝もバイバイして出かけ

おいしいといわされてたらおいしゆなり

似顔絵にしたらおもしろい顔ばかり

和歌山市

内芝としよ

贅沢へだんだん中毒する怖さ

実印を持って女は強く生き

一粒の涙が答として流れ

片想い忘れなさいと流れ雲

倉敷市

稲田豊作

子育てに勝負をかけて寡婦強し

親の汗知る子は直い道を行く

泥んこの暮らしが好きで田を売らぬ

老碌と童心一緒にやって来る

倉敷市 田 垣 方 大

和歌山市 野 村 太茂津

廢線のレールのような停退後  
カマキリの執念枯葉と同じ色  
蹠いて転んで強さ授けられ  
倅せな元旦緑にかこまれる

和歌山市 津 田 与 史

何十回目の元旦という新しき  
ターミナル朝は人間蟻となり  
大根洗う白さに今日の幸がある  
急がずあわてず貧乏抜けきれず

笠岡市 松 本 忠 三

老兵の椅子片隅に葬られ  
母の肩あれもこれも荷がかかり  
遠ざかるほどに涙が出る別れ  
悪者になつて説諭の前へ出る

寝屋川市 江 口 度

塾通い親孝行をしています  
無気味さもロマンも浮かべ夜の海  
故里の川さかのぼる四年鮭  
罪背負い人にくむこと許されず

竹原市 時 広 一 路

風吹けば風の心を知る海で  
北風の吹く日倅せ探す旅  
自画像の口から罵声出て来そう  
暫らくは名残りを惜しむ飛行雲

初日の出有為転変へ身構える

踏み出してうしろ姿は見せられぬ

手の内はみなあからさま初日の出

スポットライト当ると影に亡父が居た

米子市 小 西 雄 々

謎秘めたマグムの言葉に寝つかれず

栄転の机大きくなって見え

喪服着た色香に引かれてからの恋

恵まれぬときにわかった夫婦愛

倉吉市 奥 谷 弘 朗

束の間の得に溺れている打算

しみりとやる気にさせた師を偲ぶ

頂上の味も知らずに下り坂

荒波を乗り切る舟を妻と漕ぎ

大阪市 本 多 柳 志

美しい角度崩さぬ座りよう

久闊を叙す血圧を比べ合い

匿名の言葉を選ぶ投書欄

出土品史書よりロマン見直され

岡山市 時 末 一 灯

天衣無縫紺の背広は似合わない

退院のまず大の字に寝る畳

時刻表いつか果たせるページ操る

藁を焚くこころ亡き祖母蘇る

一粒の慈愛万燈の明りかも  
鍵っ子の宿命小さな試練受け  
七人の敵をたおして男生き  
朝を踏む大地やさしい母の音

人間が機械に支配され哀れ  
目標へ挑む男に夢がある  
根を張って雑草冬へ覚悟する  
詠りなど気にせぬ車掌のスピーカー

和泉市 西岡洛醉  
河内長野市 井上喜醉

老夫婦遠いロマンを抱いて棲み  
数えうた五線にふれる免罪符  
母と子の愛の視角に千切れ雲  
日々老ゆる様さえ父に似て親子

島根県 飯塚虎秋

枯れてても巻きついている豆の蔓  
貧しいがやっぱりうれしわが家の灯  
別れる日燃えてはならぬ人に燃え  
玄関で愚痴は言うまい靴をぬぎ

今治市 越智一水

しみじみと故郷の駅で詠りきく  
人ひとり憎めず善人花が好き  
恩情にそむき鉛の胸を抱く  
背を伸ばそうそんな卑屈になるまいぞ

島根県 榊原秀子

足を揉む子のぬくもりが肌にしみ  
古傷の疼きへ秋の雨しとど  
筋書を替えてそれから灯をともし  
ふりむけば優しい亡夫の顔にあり

三猿の教えを暮しに置いて見る  
受験期が終って絵馬は眠りこけ  
心だけ豊かになど言いきかせ  
美しく写る鏡を選つて来る

岸和田市 古野ひで  
島根県 錦織文子

嘘ついた悲しい心を秘めとけず  
満足をほくそ笑んでる肩が揺れ  
悲しみのリズムが雨の音になり  
遅いから迎えに行つてやれる父

藤井寺市 児島与呂志

理髪屋で木の心境になる庭師  
賞状を内助の功には触れず賞め  
成り金を悔いる香車の一人言  
人生の初冬を意識さす脱け毛

宇部市 平田実男

執着へみにくい顔をつき合わせ  
政治空白関係もなく縄ノレン  
窓ぎわの机へ雨雲低くたれ  
エンゲージリングだけは自費で買って来る

柳井市 弘津柳慶

— 14 —

雲の向く故里しのぶ日向ほこ  
変り身の早い男で風に乗  
口答え奥歯に冷たいものをかみ  
どっこいしょ動ける感謝忘れかけ

鳥取市 岸本 無人

弥陀の眼の涼しき堂に籠りいて  
菊作りまだ一年の夢が伸び  
扇面に恩師の遺す愛一字  
消しゴムの役目を母がしてくれる

鳥取市 大塚 豊生

てっぺんへ来てカタツムリな  
掘りごたつやっぱり亡母の温みもつ  
三十の恋へ打算が棲んでいた  
生き甲斐を問われて即答できる幸

鳥取県 川崎 秋女

日が当らなくても生きる苔の性  
戒名と距離たしかめる七回忌  
手にしたいものは橋のない向う岸  
佗しきへひとしお冴える秋の色

和歌山市 若宮 武雄

厳しさに遇わねば紅葉いろ冴えず  
練り返すほどに思い出美化される  
我が子への遺産はうしろ姿だけ  
追いつかぬ鍋若い箸よく動き

大阪市 本間 満津子

病癒え娘と妻供のみみじ狩り  
大衆も団結するとう恐さ  
排ガスにめげず可憐な野菊咲き  
菊の紋激動の世を黙し耐え

岸和田市 狭間 希久志

来る年の青写真もう神の掌に  
じゃあ又ねそれからあとは振りむかず  
へんくつで通るたしかな腕をもつ  
笛吹けど踊らぬ蛇は冬眠か

西宮市 杉浦 婦美子

悔なきを勤めこころに糧を積む  
貧そうな父に気さくな人間味  
末法の政治あざける晩鐘か  
落ち着けと影絵がそつと囁いた

平田市 久家 代仕男

元旦や妻子が下戸でちとさみし  
生かされていて定年を愚痴るまい  
包丁を持ってば愚妻の腕確か  
大卒の祝い背広は高くつき

呉市 横田 英詩

国鉄の労使は観客席にいる  
諸行無常驕る農家へ米ばなれ  
参加することに意義なし受験生  
アブナイヨボクは慎重居士となり

香川県 岡田 拳法

妙法院特別拝観(二句)

京都市 松川 杜 的

襖絵の松二の間へ続く白書院

「年寄り」はと云う語韻の中にある若さ

地球儀の何処をついても血が出そう

オーブンで話せる社長が居て栄え

東大阪市 崎 山 美 子

裁き待つ心にくもりなどはない

紫陽花に本心聞いてみたくなり

傷心に故郷の情がしみとおる

モナリザを真似て見合の写真とる

羽曳野市 榎 本 吐 来

魂胆がちらりと覗く低姿勢

松茸で話が合った市場籠

団欒のテレビに父がひとりずれ

スタンドで負け犬同志汲み交し

鳥取県 金 川 満 春

守る田の稲架かけわびし老夫婦

人生のドラマに古希の幕が開き

一物を秘めた笑顔を見抜かれる

ほのぼのと初老夫婦にある温み

寝屋川市 宮 尾 あいき

四季の無い都会の秋をキリン草

履歴書に堂々中学卒と書く

週末をきっちり予報に合す雨

自宅全焼四周年

うらみ事消えて感謝の日を生きる

京都市 山 本 規 不 風

女運悪いとそとでは云うて置き

間に合わぬ相談易者は灯に浮かす

手であけて閉めてる足へ声かける

逆らった娘が生む孫の名を付ける

鳥取市 小 林 由 多 香

明日からは嫁と呼ばれる日の朝寝

消しゴムの細る運命甘んじる

豊かなる胸毛頼りになる男

連休の疲ればんやり社で癒やし

岡山県 出 原 敬 一

離乳する孫へ茶碗の柄を選り

里の道みんな冬まつ貌となり

いささかの歳暮で果たす荷への義理

ばら垣の白衣飲酒の禁解かず

竹原市 小 島 蘭 幸

父の笛淋しがり屋になつてゐる

中年の視野に達磨が置いてある

さわやかな田舎の匂いもつ男

プロポーズジャジャ馬の瞳がぬれていた

岸和田市 福 浦 勝 晴

累代の碑“建立のため帰郷

ふるさとの水よし柿よし人もよし

海鳴りへ少年の記憶甦る

文学に縁なき妻で米を研ぐ  
ライターの炎で孤独慰める

大阪市 黒田真砂

母の忌の小雨に煙る京の街  
夫や子の話はずむ同窓会  
友の訃を聞く胃の痛み気にしつづ  
一言がすぎて日記の悔多し

大阪市 河井庸佑

上役の仕草わが身におきかえる  
一石を投じ波紋に目を据える  
守備範囲外へは出ない主義で押す  
義理で来たのもまじる慰労会

竹原市 山内静水

ご無礼は重々祝詞に渡すメモ  
父の座をおりて息子とした握手  
よくなったよくなった国道の石地蔵  
み光にやつと六十掌が合わせ

竹原市 古谷節夫

過去帳を繰れば天保と言う飢饉  
主義を持つ女の力確とみる  
雨しとど水が不足と言う文化  
子の知恵に防戦ばかりする親で

七尾市 松高秀峰

人生の泳ぎもうまくたどりつき

腹割って話す友あり年の暮

癌と聞き見舞って帰る足重く  
合掌をして一票の欲しい顔

鳥取県 福田保子

ハイヒールコツコツ女の虚勢はる  
サイドブレーキひかれた過去が疼き出し  
戦列の男に白旗などはない  
喝采をあびて脇役耐えている

和歌山市 松原寿子

胸の窓ひらけば鈴の音が冴える  
おおらかな鼓動よ恋の毬となる  
ゆとり持つ心へ言葉泳がせる  
掌の温みあなたが側に居るよう

和歌山市 浦野和子

盛者必滅石の梵字も磨滅する  
色づいて柿日本を秋にする  
ささやかな秋を小さな壺に活け  
又元の米三合で足る夫婦

和歌山市 西山幸

喝采が欲しいと言えぬ過去ばかり  
負けた影だけがとことこ従いてくる  
雑兵の父のラッパがもつ余韻  
米櫃に米あり今日も生きている

松江市 小林孤呂二

エゴイスト役人困らす策を練る

強さではなく脆さ言われている五十並の人貧しきころ覗かせる  
庭下駄も揃え一城の主たり

岡山市

花田 たけ志

無理やりに吸いとらせてる親馬鹿で

難題と心中をして生きていた

あの世への先手張り合う若い二人

火はつけず記憶の中に寝むらせる

兵庫県

北山 越山

赦されてから後悔の舟を漕ぎ

眼球が許さぬ夜長読書とし

足くせの悪さを靴に詫びて捨て

口笛を吹いて護身のガードマン

新宮市

大矢 十郎

今日からは義理の広がる新世帯

昏を待つくちびるはかわくもの

人と人の作り笑顔を見飽きる日

髪染めた娘を外人が振り返える

濱屋川市

高田 博泉

食へ頃を知ってる母でそつがない

松茸に背を向けられたままの秋

貧乏に育って笑顔はたやさない

本棚のすみで青春ねむってる

西宮市

若林 草右

水晶時計明治はネジを巻きたがり

蒟蒻のちぎりのよさが分りかけ  
除夜の鐘あしかけ二年鳴りひびき  
柿一つ残して秋は急ぎ足

ホノルル市

前山 北海

未亡人心に鎧隙見せず

凡人の喜怒に美醜の顔があり

夜咲花闇を貫く音で開き

兵庫県

大江 秋月

灰皿の吸いがら汚ないものにされ

出世せぬ男で一言多過ぎる

薬まいて水道冬へ身構える

大阪市

村山 光輪

子らと来て今又孫と居る動物園

ライオンへ孫につられて吠えてみる

母乳ですと娘子供を抱き直し

柏原市

大峠 可動

福寿草みんな笑ろうて元旦

高麗茶すすり労働しか知らぬ

陽は木陰から太陽になってゆく

姫路市

梅谿庵 不酔

あばら家の俺を城主と子等仕え

貰う身に早ようなりたい贈り物

義理と義理良心と違ううそをつき

濱屋川市

柴田 英壬子

百枚の年賀はがきの重さかな

霜の朝雀へいたわりの視線  
窓際の机へポッキリの師走

大阪市 西 森 花 村

浪曲調仲間を思う新大臣

なめくじにせまい浮世の台所

嫁きおくれやたらおみくじ受けたがり

東大阪市 竹 中 綾 女

秋寒むの日も暖かしい子持ち

夫の遺影安堵の笑みを浮べたり

不調皆老化現象で片付けられ

貝塚市 行 天 千 代

はつきりと白髪も写つす池の水

月に二度お墓の亡夫も待っている

過去の夢つなぎ合せる写真帖

岡山市 直 原 七 面 山

妻裏切った夜が白み

胸に打算の矢を番え

慌てぬ医者頼もしさ

倉敷市 小 幡 里 風

木犀へふと立ちとまる白い杖

椅子のないパーラーだから酔いつぶれ

孫が来て上を下への短い日

島根県 大 森 孝 華

むかい風世相に添うて目をつむり

いま一度タクト振りたいたい虚勢かも

四季の詩川面にのせて風渡る

岡山市 川 端 柳 子

逢える気がしてアルバムを繰ってみる

おだやかに秋の陽はじく菊の品

ため息は昨日のことにしてやる気

名古屋 大 林 曲 手

長生きで駆ける嬉しい靴の減り

引込みがつかねば俺が負けてやる

水の面に男怒りを鎮めけり

大阪市 天 正 千 梢

手もなく参いらすひと言握っている

うたかたの愛の形を見たくなり

ひと夏を生きた落鮎の背なの色

大阪市 北 勝 美

ひこばえの稲穂ののぞく気味悪さ

片付いて二人になったすき間風

茶の花へとまる蝶なしひそと咲き

東大阪市 齋 藤 三 十 四

御老体医療はただといたわられ

倦怠期空気ぐらいに思つとり

カードの嘘に世渡り教えられ

岡山市 井 上 柳 五 郎

減反に追打ちかける米のでき

よく喋る男の寡黙打算秘め

鶴の軸床はめでたい朝にする

大阪市 津 守 柳 伸

木枯らしへ浮草なりのかまえずる

ジェラシーを持たぬ女の低い鼻

ふと我れにかえれば枯葉寄りそうて

松江市 梅 本 登美也

ずるずると深みにはまる費い込み

蒸発の荷物の中に子を忘れ

絵馬一つ捧げて喜寿の心澄む

和歌山市 福 本 英 子

誰にあげよう白ささんかの花鉢

真昼のしじまぼとりと紅椿

心から許せる一人ほしい夜

米子市 佐 伯 越 子

満ちたりて小さな穴も掘っており

ふる里の野山に満ちる亡母の影

堪忍の袋につらい刺も来る

堺市 伏 見 茂 美

神はまだ試練を給う母だから

家裁からパパの不馴れな手に抱かれ

野の仏散り敷く紅葉見てこざる

大和郡山市 森 田 カズエ

三猿できた停年のふと淋し

水煮の湯気に妥協をせかされる

師のかげを踏むなど父はもう言わず

鳥取県 林 露 杖

(文化祭一句)

七宝のカウスの色に愛が浮く

夕顔の小さく最後の花をつけ

宗門はどうあれ念仏唱和する

大阪市 神 田 秀 峰

カラオケのマイクへ下手は永い唄

月刊誌読み切れぬ儘高く積み

ダイレクトメールが財布空にさせ

岡山市 岩 道 博 友

貧乏性人真似ばかりの道をゆき

愛憎の露地から生活句を起し

人柄を話す一服吸いつける 鳥取市 有 田 とし江

六十のロマンはきれいな花作り

歩かねばならぬ茨の道もある

野仏に野菊供えてハイキング

出雲市 高 橋 可 保 留

人様のうごめき猿が可笑がり

初詣手に手に絵馬の鈴が鳴る

つば飲んでテレビに見入るチャンコ鍋

兵庫県 辻 文 平

二つある目だから二つに見える愛

母ちゃんの苦労を見ていた空軒

絵日記を真赤に塗っている怒り

夜業する母の影絵を持っている 橋本市 森 脇 善 太

縛れると風は嵐になりもする  
ほのぼのとほろほろと従順な酒

羽咋市

三宅ろ亭

八十路われ夢の中では若すぎる

米子市

石垣花子

年順に差額をつけてお年玉

転作の会議戻りの歩が重い

二百戸の町内主流に非主流

岸和田市

清野こう

子を染める色にとまどう世の乱れ  
退院を囲む笑顔へ夜が更け  
出かかった本音飲み込む記者会見

泉大津市

村上春巳

天高し天女の舞か絹の雲

一日の疲れをいやすあかね雲

ふと下駄をなげて見る気の迷い道

松江市

柳楽鶴丸

針千本証にたてて夕焼ける  
煙突がさむぎむ見えるのも師走  
焚火の輪大工の自慢話聞く

美祿市

安平次弘通

保険は嫌いあなたの死を待つよう  
で教育ママベットのよう  
に子を育て

次ぎつぎと思ひ出したくない事浮ぶ

鳥取県

清水一保

山あれば谷スランプに負けまいぞ  
評価気にすると崩れるマイペース  
白旗は持たず離婚へ突っ走る

唐津市

新潟回天子

台風の爪跡政治の恥部をつき

アルコールお前とさびしく眠ろうよ

亡命でないよとはるばる渡り鳥

三重県

坪田冬花

測量の杭打ち噂は実現か  
母一人娘一人それでも未来もって生き  
今生きていた鯛に舌打ちする宴会

兵庫県

藤後実男

甘い声ころりと嘘で丸められ

傷のある私を私だけが知る

どうにでもなれ噂千里を走る

笠岡市

木山遠二

人生に馬鹿となる手を教えられ  
代役は肩身のせまい位置に座し  
健康を保証している爪の色

藤井寺市

中原比呂志

快晴で旗日で三分粥うまし

久闊を叙し自転車を押して行く

今年こそやる気の男に歳は消え  
水虫に冬眠がなく手が伸びる  
ブレーキを掛ける理性が叱られる

和歌山市  
さわらない神に勇氣をうたがわれ  
形式へ心の置き場は別に持つ  
平凡な幸せ寡婦の小さい城

吉野富子

倉敷市 齋藤通風

過剰米作るに案山子思案顔  
自滅する地球で核を持って遊び  
竹踏みのはては外科医の手にかかり

大阪市 横地雅風

夢の橋できて文化の悪も来る  
ひらめきを忘れたメモが口惜しうて  
生徒引き緊めると母の愚痴が来る

京都市 都倉求芽

よう間違える請求書だが儲けてる  
言いにくい事を主治医も察してる  
昼はコーヒー夜は左党で世を論じ

兵庫県 河原みのる

ひとの死も天寿めでたい傘の齡  
夢じゃとて捨ててしまえぬ夢もあり  
来年をまだ信じてる衣をたたむ

仙台市 川村映輝

譲りあいの席ゆずらぬ気ですわり  
おこぼれをグムにもらって生きる川  
夕日のよう燃えながらポツンと沈みたい

守口市 羽原静歩

ラッパ吹いて吹いて心の底は木枯しか  
鉛筆をぐるぐる回し孤独なり  
天地もひとつにとけて露天風呂

大阪市 神夏磯道子

木犀の香り愚痴をひっこめる  
錆びついたころへしみるローレライ  
里帰り母の灯りへさようなら

鳥取県 森田布堂

共白髪保障の出来ぬ縁結び  
炭焼きの自信が挑む灯油高  
省エネの会議が済めば酒肴

泉佐野市 阿萬萬的

信州の高原を巡りて

ホテルの壁が画になる水の色も秋  
門閉めたまま秋の色軽井沢  
カラマツの空大きく揺れてバス曲る

大阪市 藤田頂留子

下駄箱の名義書き替えせまる靴  
鍵財布所在は鈴の音で安堵  
北風が白菜の値を釣り上げる

和歌山市 坂口公子

時雨の度田面へ虹が突き刺さる  
うすこげを握れば亡母がよみがえる  
天高し休体重計に乗ったまま

下関市 国弘半休門

靈峰の不思議信者は疑わず — 高野山にて(二句)

鞭撻に暮れて不肖に暇がない

さる年に孕んで孫がござかしい

玉野市 小谷 仙山

鮭画いて赤より外に色がなし

他人の灯明るく見える不仕合せ

長い目で見れば徳だと思つても

羽曳野市 塩 満 敏

宝くじ一回位い化けてこい

ああ平和むすこに抜かれた背の高さ

禿げる筈いつも帽子のいる仕事

大阪市 柳 原 静 香

磨いてももう光らない父の靴

ひとり寝へ寄りそう猫が温かく

追い越してごめんなさいね松葉杖

松原市 北 野 久 子

浮き腰で儲け話を持つてくる

拗ねていて夫の好きな物を炊き

帯解いてはつと女のしなも解け

岸和田市 島 崎 富志子

亡き子への思慕合掌の掌にたまり

点字読む子の指先に明日がある

不器用に生きてバカンス等知らず

大東市 土 岐 トク子

身を以って貫く夫婦愛老師の詩

すばらしき仲間老後の花が咲き  
薄紅を刷いて恥じらう寒椿

大阪市 神 谷 凡九郎

太鼓判おしはつたけど妻 手術

完全看護今日の顔を見て帰る

手術台出て来た簡単に済んだとか

大阪市 西 川 誓 二

古寺拝観穢さの憂いを忘れさせ

何んで俺にお門違いの苦情聞く

久々の墓参ご無沙汰勝ちを詫び

熊野市 西久保 苔 石

寺詣り高嶺の雲の道尋ね

暗中摸索一句夜中に目をさまし

いつ果てる話も知らぬ子のねむり

尼 緑之助

冬近し芒の原を児等の詩

母が来て明治の笛は時雨する

翔んで翔んでこわれたはねの決算書

冷たさが残る握手で向い合い

怨念の水は無気味なダムにする

正 本 水 客

追い越した人にニッコリ笑われる

走り書ふつと炎が顔へくる

向い風まだまだ若い気をすてず

捨て台詞ふいと笑顔の似合う人

冬の色が心の中へ沁みてくる

菊 沢 小松園

お年玉ベースアップの例で出し

本 田 恵二朗

本堂のうしろで二人手を握り

いつ死んでもよいのがびんびんしてはりま

指さしているのも弱身持っている

諦めた笑いが人に突きささり

ほどほどに病まんと人に嫌がられ

伊 藤 茶 仏

残像と語るひととき若返えり

残像のお喋りを聞く夜のしじま

残像の微笑み温し茶の香り

残像に影が無いのがもの足らず

残像とまた逢おうぜと握手する

若 本 多久志

吉田秀哉句集「冬の家」に寄せて

教科書に載せる日を待つ冬の海

手も足も背筋も凍る冬の海

不断着のままで正月温める

八十年代前半は君 要注意

無駄使いたした石油で首を締め

西 尾 栞

喜寿過ぎてまだ求めゆくもの多く

今更に何を悔むか傘寿そこ

出かかった言葉を呑んで明日へ寝る

容赦なく弱味を突いてくれる女

逢いたさに何度かけても話し中

川 村 好 郎

元旦や七十年の猿芝居

丹波青垣の民宿にて

炉框は黒柿に似て非なる音

あれも些事これも些事なり炉辺に酌む

炉辺話医師が混りてはなやげる

浜 田 久米雄

豊葦原瑞穂国のおれは落穂

老桜のほつほつと咲く童心か

水仙が並び口開く聖歌隊

銀杏の黄労働よりも透き通り

養命酒汚辱のいのち養えり

橘 高 薫 風

ことしこそいのちある句の欲しい年

初春の空気が吸えるうれしい日

一年の計は節酒の事始

ゆっくりと歩くつもりのお元日

— 同人吟 —

## 秀句鑑賞

— 前月号から —

菊 沢 小松園

無縁仏ひとを恋うてる姿勢なり

岩田 美代

天涯孤独、見放された哀傷の中に無縁な仏は静かに眠る。無縁仏とは縁故に連がる人達が絶無でそう言ったと言う訳ではない、その理由を逆のばれば色々多様な理由があつての結果である。うす高く積み重ねられた無縁塔を見上げていると背筋に寒いものを感じる。有為転変の人の世の悲しさが迫る。

野良猫は追われる訳が判らない

仲どんたく

追う方には明白な理由があつても追われてる方にそれ程はつきりした訳が判らぬ場合だつてある。貧しさのあまり野良猫の行為に自身の保全策で止むを得なかつた場合だつてある罪の意識のないところに犯人の堂々たる場合だつてある筈である。

いざこざを聞く補聴器などいらぬ

若柳 潮花

難聴を助ける補聴器は本人の好き嫌いに關係なく責任を果してありの儘の音を運んでくれる。本人にすれば余計なことて気疲れな雑音など真平御免と言いたいところ気まずい。いざこざの時などそこは補聴器の調子の精にする位いの老獺さはこの齡になると充分持ち合はせる。

死ぬ場所もそろそろ考えねばならず

市場没食子

急に近來老人国になつて來た日本、今五人に一人は六十五歳以上の人が居りそれが數年後には四人に一人になり昭和六十五年には三人に一人の割になると謂う嬉しい様な淋しい様な国としても重大な問題である。老境に入るといつも常住坐臥死と対決している。見るもの聞くもの総べてが死と連繫している覚悟充分出來ている筈であり今更じたばたしても何うなるものでなし人生流水、水の静かきで自然の理と達觀して居る心境である。何時と判らぬ処大自然の慈悲と自若として受け止め受けて立つ悟りは疾く悲しと出來ている処か。

眼帯の中をあの日の貨車がい

嘉数千代香

いつも思ふこと此の人の句には隙がない。句の構成が科学的に動かぬものになつてこの句の眼帯がそれである。ある日のある事件が交通事件か貨車操作ミスか或いは積込の暴発事故かそれは知らぬがそれを眼帯に代表させた処が巧い。あの時と同じ貨車が行く負傷した体に傷ましく映る人世の「コマ」。

余つてもただで食わせる米は無し

工藤 甲吉

有り余る米で困る日本の現状は持てる者の悩みと言う贅沢な心配である。世界の全体の食糧が不足勝ちの現況にある結構なことに違ひないがベトナム難民の窮状を聞くにつけどうにかならぬものかと思ふ。物の代価というものに考えさせられてくる複雑な問題に併わつてくる。

井戸へいは廃語五億は現代語

木山 遠二

此の語の判る人も減つた。そこに過去と現代の距りがある。昔は政治に係りが出來ると全財産が消えて結局は残るのは、家や邸も人手に渡り井戸と堀のみになつたのであるが現代は違ふ、今の政治家は国民の知らぬ間に五億の金が入る時代は變ると言ふ皮肉な句ぬきうちにしあわせだつてやつてくる

川端 柳子

全体平仮名の句、禍は何時やつてくるか判らぬという対して半面倅せだつて一寸した弾みで何時やつてくるかも判らない禍福はなえる繩の如しと言ふ格言がそうは行かぬ処に悲劇や喜劇が出来る。神様は人を操るのが好きなかも知れない。

メモして置いたがもうスペースがない。

さようなら明日の言葉はためておく

高橋 鬼焼

正倉院歴史の汗を重く干す

谷岡 芳枝

寝転んで明日を考へてはならぬ

野呂 右近

年

賀

状

西尾葉

一九八〇年の新年をむかえてお目出度うございませう。

先取りという言葉があります。そして最近  
は特にこの言葉を使われるようになりました。  
唯今年の新年の原稿を書いている私も、ご多分に  
もれず先取りの行為であり、ボチボチ年賀状  
の句など考えている今日此頃も亦先取りであ  
りましょう。

年賀状と言えば、ホーム炬燵の上に十五セ  
ンチ位の嵩の束が積み上げられて、一杯機嫌  
で何時もよりエエ方の丹前を着せてもらって  
悠々と一枚一枚念を入れて読んでいた頃はよ  
かったが、七、八年前から年々五〇枚一〇〇  
枚と増えてきて昨年は七〇〇枚を突破して、  
元日早々から、賀状の整理に、やれやれとい  
う勿体ないことになり出した。会社、恩師、

柳友、知己、親戚等々、その中でも柳友関係  
が一番多く年々増加の一途を辿っている。そ  
の反対に会社関係の減っていくのは如何した  
事だろう。

年賀状というものは不思議なもので、出し  
たところからは来ないで、出さんところから  
来るものである。その為にその仕分も亦一苦  
勞で、七〇〇枚の賀状を前に頭をかかえるの  
である。然しそうもしておられず、硯笥をも  
つて来てボチボチ返事を書き出すのを見て、  
女房は「そうして返事を書かはるから増える  
一方ですがな、いっそもらい放しにしておい  
とかはったら、来年から来ないんと違いまっ  
か。」

「阿呆言え！向うさんが新年の挨拶してくれ  
たはるのに知らん顔出来るか。」

「そやかて。」

「そやかてもくそもあるか、今日こゝろはと言うた  
はるのに、おまえは向うむいてるか、向う  
さんよりも余計丁寧ていねいに挨拶するやろう。」と元  
日早々口喧嘩をやる仕末である。

曾て私の賀状は賀正というゴム印を押して、  
柳友にはその年の思いつきの句を書いていた  
が、故人になられた福島鉄児さんの真似をし  
て、はがきの横書にその年の干支又は御題を  
詠んだ一句を筆書きして、賀正も頌春も書か  
ずに出すことを始めた。だからこのはがきは  
新しい年を迎えた挨拶状であって、賀状でな  
いかも知れない。先年母が歿歿くなった年も接  
拶状として出した記憶がある。

それは

書斎よし服喪の初春をこもらばや

というのであった。それで或る友人から、  
「君のお母さんが歿歿くなられたから賀状を遠  
慮していたら、反対に賀状をもらった」とい  
う抗議が来たことがある。

この横書の挨拶状が如何したことが、大変  
人気があつて、受けとつた人から折返し礼状  
をもらったこともあるし、会うた時によろこ  
びの言葉をもらう事も屢々である。

私は曾て、N氏宅を訪問した時に硝子をは  
めた懸額が部屋の一隅にかかつてあつて、十  
枚程の賀状が納められていた。その中には、

その年の極彩色の御題の絵や、落判の雅な千支の画や、素晴らしい達筆の賀状の色々が縦、横に列べられていて全体として一種の楽しいムードをもった懸けものになっていた。そして主人の曰く毎年沢山戴く賀状の中から、之はと思う十枚を本年の十傑と称して、こうして額に入れて今年の目出度い心として置るのだと話された。そして、貴方のは毎年入選ですわとニッコリ笑いながら額をはずしてこられた。

その時の句は

おおらかな海元旦の酔い心地

というのであった。この年の干支は巳年で仲々巳さんの句が出来なかつたので、その年の御題の海に因んで、おおらかな海元旦の酔い心地となつて新年の御挨拶を申上げたものである。主人のN氏はいたつて、お酒が好物だから、早速差し向いで、おおらかな海の酔い心地になつた事は申すまでもない。

今、どんな句を書いたのだろうか、調べてみると、昭和四十二年には、

日本に箸紙があり祝膳

箸紙と柳の丸箸は何時の頃から正月のものになつたのか知らないが、日本の素朴な正月が嬉しいのである。

翌年は、

齢六十 三猿主義に徹せんか

丁度来年いや今年は申年だが、先取りに書いてみると、ここところがややこしい。還暦の六十歳になつて、三猿主義に徹せんものとの覚悟を詠んだものと思う、然しそうはいかづ今尚うるさく喋り、うるさいことをきいて、うるさいものを見て生きています。

その次は、

暮からのこの楽しみの寝正月

余程十二月には疲れていたものと見える。正月には寝正月を嬉しみにしていたらしい。私の曾ての句に、三カ日明治生れは寝るといふ一があるが六十を過ぎると寝るのが一番楽しいらしい。

その次の年は、

元日の書斎水仙の黄に対す

少し構えた句である。この時はせめて正月だけでも自分の部屋で机に向いたいという心境だつたことを思い出す。そして楚々とした中に凛とした水仙の一輪さしが迎も好きである。又こんな句を書いた事がある。

元旦や酒禪一味の心しる

之は路郎先生の「凡聖一如元旦の心しる」の下五を黙って拝借したもので、朝から陶然となる元旦の酒に禅味があると、ひとり悦に入つたところである。

その次の年は、

元旦や我泰山の如く座す

家長ということ、座るべきところへ座つて、盃手に泰山のように動かず、この頃流行の関白宣言の歌のようにデンと構えたところであらう。

又或年の句には、

読初や句集旅人福寿草

之は勿論、我等が聖書のようにしている、路郎先生の句集「旅人」と、葭乃奥さんの句集「福寿草」を読初めにした楽しいそして温かいお正月の雰囲気である。

一昨年は午年であつたので、

床に置く埴輪の馬のあたたかく

という句であつた。

昨年は未年であつたが、

和顔愛語元旦の心しる

という句を書いた。一年中和顔愛語であればよいがと念願したことである。

さて来年はいや今年は申年だが、もう三猿主義でもあるまい、何か佳い句をと考えているが仲々出来ない。とり敢えず

元旦や七十年の猿芝居

という句を用意している。七十歳の古稀を迎えたが、ふり返つてみると、全く人真似許りの猿芝居だつた。申年を迎えての自嘲の一句を入れて、この稿のめぐりとする。

# 川柳 太平記 (20)

## 柳多留 お目見得

東野 大八

柳多留三十篇の序文中に

「…一会の寄高二万五千六百全員に及びしは実に稀代の判者というべし」

と記されている。これを八月五日から十二月五日までの十三会の寄句を合算すると実に十三万句となる。これを一句十六文とすると一カ年の初代川柳の懐ろに入る入花料は、ざつと二百八十万文になる。(樽選句料を除く)

江戸時代には、米の価格は「百文何升」で計算していた。寛政末から天保にかけての銭相場は、一両に対し六貫文から六貫五百文の間を上下していた。これをかりに金一両が銭六貫文に当たっていたものと計算してみると、右の米一両の場合は一合六文。従つてこの時点の米一升は六十文という計算になる。

とにかく初代川柳の頃は右の相場より三十分年古く、銭百文は米三升というのが相場だったらしいから、万句合からの収入を概算すると米価は一石当り銀六十匁で、これを昭和十年頃の米価にあてはめると約二十円。テノミネーション実施の資料によると、昭和十年の米価に対し、現在千三百八十倍に相当するところがある。ヒマと興味のある方は一体どれぐらいの価値になるか、とくと勘定願いたい。

いずれにしても初代川柳の万句合収入は莫大なもので、これに柳多留の事業収益を加えると一層輪がかかる。今日なら毎年五月に発表される長者番付の筆頭格であることはまちがいない。

「誹風柳多留」は明和二年（一七六五）七

月にその初篇が出た。板元は上野の星運堂花屋久次郎で、呉陵軒可有のその序によると、

「さみだれのつれづれにあそこの隅、ここの棚より、ふるとしの前句付のすりものを挿し出し、机のうえに詠る折ふし、書肆何某來たりて、このままに反古になさんも本意なしといえるに任かせ、一句にて句意のわかりやすきを挙げて一帖となしぬ。なかんずく当世の誹風の余情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す」

とその発刊趣意書を記している。

ところですが、なぜ柳多留と命名したか、これには多説があるので、念のため説明しておく必要があるだろう。

右の序文中にある「いもせ柳樽」だが、これは、妹背（いもせ）とは婚姻を意味し、今日の結納目録にも「家内喜多留」が必ずつけられている。これは婚礼の祝酒を意味しているものである。酒樽は江戸期のはじめ、伊丹灘での醸造家が、木工技術の発達につれ、竹によるたがが生れたことよつて桶（おけ）を思いつき、製造、運搬にこれを用いるようになった。材料は杉やさわらの木などだが、おめでたい時には柳樽という柳の木で作ったおけを用いる習慣が生れた。一名手樽ともいい、儀式用には、朱の漆を塗ったもので、婚

礼には欠かせぬ飾り樽であった。柳多留一篇にもハッキリ「誹風家内喜多留」と明記されている。

筆者は素朴に婚禮の酒樽説をとるが、異説も多い。木村半文銭は、史記の「滑稽は酒器也」をあげ、「奥義抄」を例にとった。筆者もかつてこれに賛意を表した口だ。さきの山沢英雄は「柳多留の板元」が花久であるところから「花屋の柳」を生かしたと考へる、とある。

そうかと思えば阪井久良岐は「妹背川柳樽とある以上、民衆的前句付冠句付と、一段高い知識階級の俳諧との結婚を意味する。」と述べている。さらにこの筆者とて、名主の柄井八右衛門の上に立つ町年寄樽屋藤左衛門の樽にかけたと書いたこともある。

こうなると石崎柳石（広島）ではないが、一般この道の研究家は、最初の一説を宗説とし、次の二説は寓意的興味で扱ひ、三説目は素強付会の説位に入るの説に苦笑する。

柳樽のせんさくはこれ位にして、この柳樽の存在価値について杉本長重「柳多留」から借文しよう。（以下大要）

「彼（初代川柳）が宝暦七年前句付点者として立机して以来、とみに頭角を現し、すでにこの集の成立に先立って、同時代の多くの

先輩・同輩をしのいで前句付選者の首位にたち、死に至るまで長くその地位を他に譲らなかつたのは、もとより選句眼がすぐれていたもの、また時代の好尚を察する明敏さと、選句態度について公平・慎重ぶりをたたえられ人柄のよさによるものであろう。

これがいわゆる「取次」の応援、「組連」の支持をさそい、多くの投句を寄せて、川柳の名を世に喧伝させた所以であるが、同時に「柳多留」の刊行が趨勢に拍車をかけた効果を見のがすことはできない。いな、それよりも、もし選句発表の形式が片々たる「曆刷り万句合」の形で終始し「柳多留」の冊子の形をとらなかつたとしたら、果して今日まで残存し、かの多くの句とともに、川柳その人の名と文芸形態としての名を残し得たろうか。

柳多留18篇の巻頭に「東都前句万句合判者連名」として掲げられた、蝶々子、苔翁、竹丈、雲鼓、白翁、菊丈、取月、如露、嶺松、南花坊、黛山、一翁、千鶴、圭女、東月、白亀、露丸、机鳥、錦江等の人々は忘れ去られひとり川柳のみが記憶されている事実と、万句合がほとんど散逸して残らぬ事実とがその答であらう。

「柳多留」は明和二年に初篇を出し、天保十年百六十七篇を出して終焉する。初代川柳

は初篇から寛政元年二十三篇を出し、その翌年死去するが、この間三十五年の歲月を経てゐる。彼はこの間「末摘花」三篇と「誹風柳多留拾遺」十篇を出している。これが初代川柳の川柳上の事蹟で名のあるものだが、彼は彼を支持する「組連」の選句にも當つてゐる。これら組連あつての「柳多留」だから当然の選句協力であるものの、その精神的な活躍は注目し得る。その組連のものも花久などの手を経て一枚もの刷りものになつてゐるが、参考までに列記するとつぎの通り。

▽桜の実（明和4年桜木連・花久扱）

▽川傍柳（天明元年・蓬来連〓五篇）

▽やない宮（天明3年柳水連〓四篇）

▽菽姑柳（天明5年麴町梅の月連）

▽柳籠裏（天明6年麴町高砂連〓三篇）

▽玉柳（天明7年〓書名不明確臨時一枚刷）

柳多留を支えたブレーションは、桜木連で、上野界隈の有力な商家、板元、文人らが構成し上野のさくらにちなんでつけたもので、柳多留篇者呉陵軒可有もその連中の一人。

柳多留は厳密にいへば、万句合のみに依存したものではない。武玉川からのものもあれば、「俳諧つぎり」（露竹舎畫成）等は立派に川柳で通用する別の刊行物でその句もある。

俳風柳多留廿五篇研究

— (二七丁) —



鈴木 黄

紀内 恒久・青木 迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山 三柳・入江 勇  
清 博美・八木 敬一・岡田 甫

490 二十つきでハふか也と子ノ曰ク

紀内—不明。

青木—同じく不明。岡田三面子翁『虚心観』

の註に「二十突きは一合四文の安す酒の意か未詳」とある。

岡田—錢を数えるのに、親指以外の四本で前方へ突き出す。これを「錢を突く」という。

つまり「一突き」は四文、「二十突は八十文一合だと八文の酒。これは当時のコトバで云えば悪酒クラス。

491 結納が来たと桐の木はつつてる

紀内—当時、女の子が生まれると、同時に桐の木を植え、嫁入りの際、その桐で家具を作つてもたせたという。結納が来ていよいよ嫁入り。桐の木をけずり準備万端整えるのであ

る。「はつる」はけずるの意。

桐の木ハ村の娘とおないどし

二五・32

青木 賛

虫のつかぬ内と桐の木をひかせ

二五・12

桐の木の目で娘の年が知れ

二七・9

岡田—同。

492 茶びんの火かりにかゝるを下戸おさへ

紀内—「茶びん」については前出したので省略する。野がけて最も困るのは煙草の火のかけで、煙草の火を借るという趣向の句は多い。これもその一つ。

茶びんの火を借りるのに、酔っぱらっているので倒れこまぬよう下戸がうしろからおさ

えているのである。

西原—賛。顯原退蔵『川柳雑俳用語考』に、「句外に花見掃りの酔漢を句はせたのが面白

い」とあり。

室山—この句所収の『川柳年中行事』の頭註は「オイよせよ、向うは御大名だぜ。『川柳風俗志』は「よろ／＼しながら煙草の火を一つなどと煙管をつき出す」。いずれも奥方・女中連の花見としている。この方の解に従いたい。

岡田—室山説に賛。

493 素見物首数を見る不繁昌

紀内—「素見物」これも前出。

素見眼をやすめて通る物仕廻

の反対。素見が頭数を勘定する程、張見世に

卷三・6

遊女が残っているとは、不繁昌の証拠。  
室山一贊。戦のあとの首実験めかしている。  
八木一贊。

素見の足のとまるのハ直キにうれ

第一五

岡田一同。

494 丁寧にさかそりをする御膳のり

紀内一不明。

青木一同くく不明。駄労働を記せば、上等の  
海苔は、干し上った時には、葎實のごみを丁  
寧に取り払う。それがあたかも逆剃りの如く  
である、というのではなからうか。安物の海  
苔には、葎の皮がそのままついている事が時  
たまある。

西原一青木説に贊。御膳のりがはつきりしな  
いが、「御膳米」が將軍用の飯米であるから、  
御膳のりも將軍用に供される海苔であらう。  
さすれば、表面をみがきたてられて、紫黒光  
りになり献上されるのであらう。

岡田一同。

495 分地へハ從五位のふくのやつを出し

紀内一吉原「名代」の句。

從五位は赤衣といつて緋色の袍を着ていた。  
新造を五位に見たて、その昔国司でありなが  
ら任地におもむかない逸任をふまえて、女郎

が客の部屋へ行かず、名代を出すことを詠ん  
だ句。

入江一贊。分地〓廻部屋のたとえ、ぶんちと  
も読む。

むごい事わけちへふとん一ツ出し

三三・七

けいせいのぶんちハ夜具がうすひなり

天七・葎2

岡田一同。

(二八丁)

496 母の双六盤象牙ぬけている

青木一母の所持している双六盤は、古いもの  
らしく盤上の縦・横の線に象牙がはめこまれ  
たものではあるが、年を経たせいか所々象牙  
が折れて抜けている。今では使いもしないの  
に、母にとっては思い出のある品物なのか処  
分しようともしない。

西原一贊。母が嫁入りの時持参したもの。飾  
りの象牙がとれているのは、時の経過を考え  
させる。

入江一同。あるいは、丸形の駒(象牙細工)  
が不足しているのか。

岡田一同。当時の女性が弄んだ双六盤は、中国風  
の(朝鮮も同じ)細長い物でした。盤の条目  
に象牙をはめ込んだ上等品もあるいはあつた

かも知れないが、句で象牙が足りないという  
のは、やはり入江氏のいうように駒と考える  
のが無理がないと思います。

497 おそろしい十七文字ハあたご也

青木一明智光秀が織田信長より西征の命を受  
け、居城丹波の龜山に帰る途中京都の愛宕山  
に登り、中国出征の折願の為といつて、西之  
坊威徳院に宿し、百韻を催して、「時は今天  
が下知る五月哉」と発句を詠んだ。紹巴はそ  
の席上に在り、この句振りに依つて光秀に叛  
心あるを悟り、今に天下に一大事あるを予知  
したという。

愛宕山(京都の)で催された百韻の光秀の  
発句は、叛心を暗示しているので空おそろし

'80 頌 春

二十五篇研究グループ

いというのである。

本能寺さてこそなあと紹巴いひ

安元梅2

西原一贊。この話は『常山紀談』(巻六)にみ  
える。

岡田一贊。



同人集

私

の

一

句

(到着順)

みちのくの寒さを笛は呼んで  
 銀の鞍置ける駱駝にした女  
 四季の花咲かせ一軒立ち退かず  
 子が走るレールの果てを信じたい  
 天使とは誰も気づかぬ知恵おくれ  
 流転終る男小さな愛を得て  
 今日生きる手のつり皮をはなさない  
 振り袖で女の歩巾もどる初春  
 逢曳の場所に氏神さんを借り  
 ワクチンが無い日本の平和病  
 お地藏さんに盗んだ柿を一つあげ  
 経済も文化も進み使い捨て  
 爽やかな日宝くじ買ってみる  
 大声で呼べば届くか雲の峰  
 拝まれる金になりたい金の私語  
 取りあえずなど都合のよい文句  
 玉手箱開けないままの世を願う

岡山市	姫路市	岡山市	富田林市	倉敷市	出雲市	兵庫県	青森市	東大阪市	神戸市	大阪市	堺市	神戸市	大阪市	尼崎市	高槻市	大阪市	正本
浜田	梅田	嘉数	和田	野田	原山	遠藤	工藤	市場	仲ど	中川	高橋	中村	江城	黒川	若柳	正本	水客
久米	庵不	千代	維久	素身	独可	山甲	藤吉	没食	どん	滋	千	ゆき	修	紫	潮	香	花
雄	醉	香	子	郎	仙	住	吉	食	た	く	雀	子	を	史	香	花	客



慰謝料で育てる子供は食べざかり  
 一隅を照らす灯それでよし  
 臆病のおかげで定年無事終える  
 私之余生 信号黄のまま抜ける  
 桃咲けば桃生る天を疑わぬ  
 鮮やかな彩だけ掬う昔ごと  
 叩かれて弾む手毬の性が欲し  
 女抱く日もなく法衣たたまれる  
 祝い酒のんで我家を忘れおり  
 頼る影胸の余白に生きつづけ  
 一言が欲しいな父の居らぬ家  
 冬日向墓地のひと時気が和ごむ  
 胸像の巖父にジッと見つめられ  
 降り積る心の雪の私語なるか  
 迷惑は承知と迷惑泣きつかれ  
 月給もこれが最後か手が冷える  
 土瓶蒸し胸のなまりが溶けてゆく  
 捨て球を投げる日もあり生きる道  
 書くだけは書いて見ますとさからわず  
 古稀過ぎた命を張って見ますとさからわず  
 汐の香を吸うてこの子も漁夫となる

(退職)

倉敷市	高槻市	大阪市	今治市	濱屋川市	藤井寺市	大田市	倉敷市	鳥取県	貝塚市	島根県	島根県	唐津市	檀原市	和歌山市	富田林市	島根県	松江市	宝塚市	守口市	米子市
藤井	福田	小林	長野	柴田	笠原	藤田	水粉	鈴木	行天	梅森	大森	新岡	岩井	内芝	岩田	小砂	中川	傍島	村田	小西
春日	丁路	トメ	文庫	英壬	原吸	軒太	千翁	木村	天千	みど	孝華	岡回	本蔭	とし	美白	晃男	静馬	瓢太	飄太	雄々



訛まだこなせず戦後からの郷  
 一本の釘を信じて棟上げる  
 本気になつて己を叱つてず  
 ふるりに地酒があつて父あり  
 向き合つた目も活き活きと進む手話  
 一ト筋に生きた道にも廻り道  
 父祖譲らず生児に二つの名を付ける  
 お茶を注ぐ音が倅せ話かけ  
 合掌をほどけば自我が動きだす  
 拗ねてた娘が媚び  
 空蟬や我七十の掌に  
 踏まれぬ麦に寒さが耐えられず  
 喪の家で一際匂う沈丁花  
 派手すぎるとセツトで小走りして帰り  
 きっかけを作れば男手に負えぬ  
 赦すとき雨の音にも詩がある  
 いつ寝ても何時起きても良いひとり  
 逆らわぬ主義で足跡のこさない  
 ママの真似幼女仏にお茶を上げ  
 仮面など要らない人に会う笑顔  
 続々と生まれ続々と死なず

和歌山市	高知市	東大阪市	大和郡山市	東大阪市	竹原市	呉市	堺市	京都市	倉敷市	八尾市	岡山県	島根県	島根県	京都市	大阪市	守口市	伊丹市	大阪市	大阪市	鳥取市
津田	川竹	桑原	森田	竹中	時広	林野	伏見	松川	田垣	西尾	直原	堀江	堀江	山本	欄	野呂	榎谷	天正	室谷	河村
与史	松風	喜風	力工	綾女	一光	甦美	茂杜	方的	大榎	山	子	朗	正	不	右	寿	千	徹	日	
	風	風	工	女	路	光	美	的	大	榎	山	子	朗	正	右	寿	千	徹	日	満



川柳を愛して夢の限りなき  
 十字架を負うて周囲に気づかせず  
 心臓を突き刺す言葉待ち遠し  
 ふり向くな昨日の愚痴が顔を出す  
 明日咲く花を見つめていた瞳  
 ぶつつけた鞠はそれだけね返り  
 切り札を持たぬ夫婦で頼り合い  
 老いの手の珠を放てば野火になる  
 雑魚ついに大河へ挑む日を迎え  
 引揚げて築いた家があたたかい  
 嗚呼平和女にやせる本が売れ  
 雑草の俺俺なり足の跡  
 風呂焚いて勤め帰りを待つ余生  
 茜さす雲海の果て浄土かも  
 老二人ほっと一息孫の留守  
 電線が唸る豆腐が売られる  
 主義を持つ女の道にある誇り  
 子の頬を叩いた手にある痛み  
 師匠から手抜きの手も教えられ  
 止まり木の隅が私の指定席  
 ささやかなぜいたくは白で着る

八尾市	大阪市	大阪市	大阪市	島根県	松江市	岸和田市	岸和田市	出雲市	和泉市	大阪市	倉吉市	和歌山県	岡山市	美祿市	大阪市	島根県	大阪市	和歌山県	米子市	鳥取市
宮西	津守	河村	川口	錦織	梅本	清野	古野	高橋	西岡	本多	奥谷	中根	時末	安平	北勝	飯塚	江口	野村	八木	有田
弥柳	石弘	弘文	文美	本登	野登	野登	野登	橋可保	岡洛	多柳	谷弘	根勇	末一	平次	勝美	塚虎	口茂	村太	木千	田とし
生伸	捨生	生子	也	也	也	也	也	留	醉	志	朗	太	灯	道	美	秋	度	津	代	江



娘からの電話かあさんとかわってよ  
 主役にはなれぬピエロの名人芸  
 顔洗う水にも春の来た安堵  
 酔っているものかと他人の靴をはき  
 母の愚痴父の懺悔や低い屋根  
 頂点に立てば努力の汗が引き  
 フルゲートドラマの幕が今開く  
 倅せがまだ残ってた掌に  
 大阪の商魂立派に損をする  
 前進の構えで玄関並ぶ靴  
 のぞいてる私のぞかれています私  
 趣味多忙善人ちびた靴履いて  
 夕映えの色紙に墨が燃えている  
 六法全書愛の言葉が見当らず  
 未知数の夫へロマンの灯を消さず  
 しあわせは同じリズムで重ねる日  
 鶏に似たる男が帰る月給日  
 和顔愛語成程是だ書止る  
 秋そぞろ夢二思えば尚そぞろ  
 本当の俺を鏡もうつさない  
 沈黙の小石に滾る遠い海

和歌山市	大阪市	守口市	鳥取県	羽曳野市	東大阪市	米子市	西宮市	京都市	呉市	平田市	藤井寺市	泉大津市	鳥取県	大阪市	兵庫県	八尾市	宇部市	鳥取市	米子市	柳井市
西山	神谷凡九	羽原静	金川満	榎本吐	崎山美	林瑞	杉浦婦美	都倉求	榎田英	久家代仕	中原比呂	村上春	川崎秋	河井庸	藤後実	大田美	平田実	岸本無	石垣花	弘津柳
幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎	幸郎



溪流の淀みにサボリのよ  
 炎天のそよとも吹かず原爆忌  
 父と子の湯舟に浮いて童話  
 一族の疼みが故郷の土にある  
 負け犬がやけに可愛い孤独の夜  
 座布団を拝辞言わせてもらいます  
 虫の声男盛りにある不安  
 一生の明暗となる発表日  
 約束を違え素顔を見てしま  
 チャンとした理由があつて昼の酒  
 命棒の重荷になる日の渡り鳥  
 女人こけし今年も一人桃の花  
 君が代を明治の声で歌い上げ  
 サラ金の利息が招く蟻地獄  
 情性の日つまずいて知る愛の鞭  
 眠りたいとき眠って妻老いる  
 胸張れる貧しさなんだ秋の雲  
 楠玉が割れて明日が転げ出る  
 憎まれてもよし三猿は佗しゆうて  
 青い鳥捨身の背で歌い出す  
 厄介論米の怒りはどこへ行く

泉佐野市	鳥取県	竹原市	岡山県	岸和田市	竹原市	竹原市	竹原市	七尾市	今治市	松江市	桜井市	寝屋川市	ホノルル市	三重県	岡山県	仙台市	東大阪市	倉吉市	大阪市	和歌山市	出雲市
阿	森	小	出	福	山	古	松	越	恒	河	宮	前	坪	岩	川	本	本	渡	本	坂	尼
萬	田	島	原	浦	内	谷	高	智	松	合	尾	山	山	北	冬	博	映	清	独	間	口
萬	布	蘭	敬	勝	静	節	秀	一	町	茂	あ	北	北	海	花	友	輝	人	歩	津	之
的	堂	幸	一	晴	水	夫	峰	水	紅	雄	き	海	海	海	花	友	輝	人	歩	津	之





鈴が掌に踊るあなたに逢えた日は  
 解き捨てた帯がトグロを巻いている  
 ふるさとは帛紗大事に受けつがれ  
 乗りかえの駅線が多すぎる  
 河内弁でサラ金業者取りたてる  
 よい酒になつた夫の年思う  
 降りいでも降つても被害出る皮肉  
 さまざまな岐路が私を強くする  
 飼われたる鶯あわれ梅も見ず  
 酒飲めぬ男真つ先き下座につき  
 流れ玉受けインペーダで傷だらけ  
 糸切歯キツチり糸の切れた音  
 おめでとう書けない葉書書いてます  
 思ひ出の雛金婚の日を飾り  
 淋しさに耐える老母の髪をすく  
 指嚙んで嚙んで情にうえており  
 テーブルのりんごも梨も横を向く  
 思い断つときいてねいに手を洗う  
 残業の蟻同士平均台にいる  
 花の散る速度で心変りする  
 自分を捜がしに今日も寄席へ行く

大阪市	柏原市	柏原市	岡山市	八尾市	倉敷市	西宮市	鳥取市	明石市	姫路市	寝屋川市	羽咋市	大阪市	富田林市	岸和田市	岸和田市	岸和田市	岸和田市	岸和田市	和歌山市	
不二田	小谷	大峠	川端	高橋	臼井	藤村	加藤	市川	植村	香川	三宅	山阿	藤岡	林春	島崎	高橋	植山	高橋	大坂	松原
一三夫	葉子	可動	柳子	夕花	林坊	貞山	真山	きよ	客遊	亞成	ろ亭	阿茶	花梢	春栄	富士	幸代	武助	操子	形水	寿子

# 水煙抄

川村好郎選

大阪市 西出英子

ひらかない傘を後生に虹の橋  
出雲市 吉岡 きみえ

脱皮する昆虫の真似してみたし  
夕陽燃え西方浄土を信じさせ

子をねかせ夫婦でひろげる地図もあり

母である強さ脆さで子を叱る  
朝起きを思えば夜長楽しめず

去る人を追わぬおんなのうすい胸  
愛つなぐすべなき秋の冷えに堪え

マイペース方弁にしてなまけとく

音たてて積木崩れる愛もある  
コスモスの可憐さわたしにもあった過去

広島市 光井みほ

今治市 矢野佳雲

やがて来る別離へ日々を重く抱く  
一人身の古いへ誤算がつきささる

浮草も日向に出たい風を待ち  
忍従はガラスを這うたカタツムリ

人並みの歩巾を呉れぬ向い風  
木枯しが一つの肺を攻めにくる  
息苦し片肺がゆく人生譜

親の目に天才のまま幼児逝く  
一座みな本音を出さぬ煙草の輪  
ゆったりと行く結論の出てる会

八尾市 高杉千歩

富田林市 大道 美乙女

共に老い迎える春へ歩を合わせ  
苔むすまで見届けられぬ墓洗う  
芒ゆらゆら挽歌奏でる野に遊ぶ  
瘦身の曼珠沙華にも燃える秋

朝寝などたまにはほしい小商人  
粟おこし入れて帰省の秋まつり  
灯りから笑いこぼれる母子家庭

愛替う二人をつつむ並木道

米子市 雜賀美世

捨てられた野菜も芽ぶく力秘め

義理の宴はずす合図を頼んどき

天寿なお惜しむ通夜の灯がゆれる

老母の背のまるみに本音言い出せず

名古屋市 越村 枯梢

笑われてから三面鏡が恐くなり

エリート靴は片減りなどしない

蓬髪をなびかせ孤高でいるつもり

ナツメロを都会砂漠の中で聞く

福山市 桑田 静子

糸くずの膝を払えば十三夜

指貫のくびれに女の忍ぶ意地

小春日へ迷うた桜のいじらしく

寂しさはわたし何しに立ったやら

大和高田市 岸本 豊平次

僅でも一隅照らす夢を持ち

気付かれぬ嘘に安堵の胸をなで

暇なのと忙しいのが終電車

独り者テレビに笑い貰ってる

高根県 松本文子

云い負けてケロリと出来るのも女

やがてくる大波に向け身がまえる

楯となるつもりでいつも邪魔がられ

云い勝ってからの秘かに身がまえる

出雲市 石倉 美佐子

片隅に置かれてしまった母の膳

バーケンの袖が肌に馴染みかね

初春に躰糸とる江戸小紋

新しい日記幸せ小さくとも

岸和田市 原 さよ子

八方美人みんなに不義理してしまい

わからぬが義理で出かける絵画展

青空の青さに悩み吸いとらせ

木の香り釘を打つのもおしまれる

寝屋川市 高田 てまり

父親の抜け殻がある日曜日

崩れゆく積木の響き胸で聞く

鍵穴が女の溜め息聞いている

呉市 山根 里香

いずれ勝つ亀は歩巾を信じきり

原色の好きな女の素行歴

鋭角の視野で見つめる義理の仲

高槻市 竹内 花代子

風邪連れて女も秋の旅に出る

義理を欠くことも長寿の秘訣とか

着て歩く喜びもない歳になり

大阪市 大野 武太

下手だから四十年もギター弾く

ミスタツチ不協和音を怪しまれ  
お荷物は絃バスですと敬遠され

兵庫県

中田 白 李

まだ遊びたい子等へ秋の陽が沈む  
スーパ一の籠持つ男瘦せて見え  
ひとり立ちできぬ菊花のあわれさよ

和歌山県

天 満 三千代

あがいても自然に勝てず風のまま

明日あるさ夕やけ空に励まされ

目を閉じて心に道を問うてみる

兵庫県

石 井 深 月

音符がない人生リズムにのりきれず

五線譜に人生音符おいてみた

人生譜高いドの音低い音

八戸市

島 田 昭 治

雑草に我が生き様を笑われる

妻のスト国鉄よりも身にこたえ

病人に相槌打って欠伸でる

尼崎市

中 谷 利 美

読めぬから上手に見える書道展

どこまでが嘘かまことか泣き上戸

新妻に中座をさせてよし聞こう

米子市

野 坂 な み

掌を合わす心で余生円く生き

山登る道表あり裏もあり

筋通す明治の気骨色褪る

大阪市

内 藤 ますえ

説得にひと言多い逆効果

大安の今日は大役負う袂抄

言い負けて昔話にふれたがり

大阪市

藤 森 小雅子

盲判押す人間の裏表

ピエロの仮面で今日も悲なし

父と子の対話が弾むウイスキー

東予市

小 山 悠 泉

人それぞれ生きる暮しの詩がある

子の為めに踏台になる父でよい

安心を売る保険屋の口上手

浜田市

佐 々 木 裕

サラ金のネタも笑えぬ漫才死

受け皿は息子に託す共稼ぎ

菊日和鏽を落した共稼ぎ

八尾市

田 中 紀美代

秋風とデュエットすすきの丘に佇つ

愛されて愛する方の鈴しまう

猿を描くどこかが好きな人に似る

米子市

桑 原 伊 都

階段に若さが弾むリズム持ち

潮騒が心を癒やす旅まくら

囲いから古い女ははみ出せず

唐津市 浜本 久仁於

明日からは余生と云う日の膳に座す

いとし老妻世間話を聞きたがり  
八十四で晴耕雨読の出来る幸  
腹割って話して心の月冴える

永田町どこまで続く泥濘ぞ  
天運を賭ける両手は逞しい

西宮市 山田 喜代子

吹田市 藤原 世史春

蠅たたき小さい命そこにみる

あゆめども道尚遠き無心の里

取り調べ逃げるに病院よい所  
新婚の末っ娘用もない電話  
座蒲団が舞い飛ぶほどの名勝負

落葉炊く煙の行方浄土かも

諫早市 江副 二牛

關病の窓を秋風通り抜け  
正論をはげばかたくな奴にされ  
島根県 星野 侑正

天平の雲かも仰ぐ五輪塔

新婚の切符は甘い話し聞く

献金という政治家の旗じるし  
バランスのとれたカロリーに味がない  
総社市 水子 つるえ

省エネの冬着ぶくれて寒に耐え

京都市 松川 芳子

文化とは他人の身にもなって見る  
恋を知る女夕陽が眩し過ぎ  
出雲市 園山 多賀子

姉よりも上に見られた母の愚痴

京の庭借景団地に邪魔をされ

島根県 木村 はじめ

叙勲など縁なく老は揪握る

黒色も灰色も並ぶ初国会

年毎に漬物石が重くなり  
糠に釘知りつつ叱らねばならず  
岡山県 池田 半仙

選挙戦すめばちり紙交換車

今治市 和田 宏

拳より痛いことばを友が呉れ  
肩書を取ればおんなじ凡夫なり  
旭川市 朝倉 大柏

札束で押えた口が偽証罪

帳尻へ夜が短かい決算期

連休の孫待つ老いに雨が降る  
内職は万に遠いが達者です  
寝屋川市 福富 隆子

右で聞き左へ抜けてゆく注意

岡山市 串田 句味地

茶柱にすくわれて居る朝の箸  
心まで浮かずガラスも曇りがち

熊本市 北川 一進

熊本市 有働 芳仙

やり直す人生見栄をすて給へ

法灯へ浮世をすてた数珠の艶

鳥取県 羽津川 公乃

受賞した主役が照れる祝い酒  
慶弔の電報こまめに票かせぎ

松山市 竹内 寿美

掌に残るぬくもり握り愛信じ  
袖子を煮て女独りを秋の夜

新宮市 辻 式

いさかいの朝は斜めに風が吹く  
光陰に二の矢の欲しい日のあせり

尾鷲市 渡辺 伊津志

老若の溝埋めてゆく鐘が鳴り  
聞き返すのでつまらない洒落になり

岸和田市 吉水 照江

観音講思いおもいのぐちを吐き  
口にせず握る手に手に温りを

豊中市 満仲 きく子

振りあげたこぶしわたしが打てますか  
群衆のなかにいるのにこの孤独

島根県 園山 栄

美しい義理は小さく書く寸志  
従順と云われる腹が煮えかえる

大阪市 溝淵 美紀子

予約制医者に腹立つ歯の痛み  
日向ぼこ猫に浮世の風吹かず

鳥取県 石井 雅水

良妻の見本のような大欠伸  
平凡へふとむなしさが通り抜け

和歌山市 堀端 三男

きっかけを掴めば廃車も動き出す  
無理押しに負けて片棒かつぐはめ

鳥取市 中森 葉士人

北風の砂丘よ愛情冷え切って  
瀬と早さ競って芥得意そう

米子市 菅井 未知

老妻が抱く夢は家計に重すぎて  
始業ベル生徒に階段追いこされ

尾崎市 中辻 千子

嫁姑のドラマ気にする年になり  
しまい風呂に浸る果報今日も無事

羽島市 伊藤 静枝

反対を押切る恋を信じ合ひ  
陽にこぼる小菊咲かせて秋惜しむ

唐津市 桑原 掬治

晩秋に傾く桐の影法師

トンネルを抜ければ朝日窓にさす

唐津市 山下勝一

あやつりの大事なところで糸が切れ

屋台骨ゆるみ白蟻食い荒らし

唐津市 浜本義美

曳山を六十年も観て飽かぬ

つめ腹を切らせ中味に蓋をする (KDD事件)

唐津市 田口虹汀

生前の言葉が何時も傍に居る (五木翁の死を悼み)

昇る日は沈むその日を知っている

羽曳野市 麻野幽玄  
(秋敏改メ)

お互いを庇い夫婦にある歩巾

編棒がはずむ婦人科待合所

寝屋川市 小林鯛牙子

子だくさん生きがいなどは言うけれど

持ち回り付帯事項が増えていく

羽島市 時田誠一

赤ばかりで進めぬ人生の信号機

風向きのままには歩かぬ意地もあり

島根県 山根峰雪

残業の子の足音床で聞く

常会を子に譲ってから世がせまし

長崎県 岩崎和子

よろこびが素直に出せぬ不倖せ

もういまは過去を追わないことに慣れ

鳥取県 森田熊生

ばくの芽がやっとな出て来た異動聞く

全線開通騒音になやまされ

金策的もなく来た風の街

秋深く気儘な旅のローカル車

旧姓で呼び合い今日は飲み明かし

からんだり泣いたり酒と言う不思議

元気になあ祖母の鼻水尊けれ

夢よもう一度と齡を考えず

それぞれが暮しが詰まるゴミ袋

孤高なんて所詮はひとりよがりです

通院が楽しくなる菊の花

再会のないままくちるいわし雲

波風を沈める母の口まるし

私が播いた種で黙って刈っている

高説をうけたまわってすぐ忘れ

枚方市 栗林光夫

大阪府 岩田八文銭

広島市 すがかつこ

富田林市 中村優

出雲市 板垣夢酔

米子市 青戸美佐

晩酌がなんだか不味い秋なのに  
岡山県 柳原孝柳

障子貼る手先のにおし秋暮る  
泉佐野市 大工静子

日曜も祭日もない救急車  
高知県 山下登舟  
(前月分) (登改メ)

人の道踏みはずせない苦勞人  
今治市 新居田胡頼子

名月に持ったをかける重ね雲  
小松市 馬場魚山

受付で薔薇を付けられ逃られず  
大阪市 土屋雅洋

保険嫌い有無を云わさぬ人が来る  
佐度郡 高野不二

突然に名も無き草に光る花  
東大阪市 三宅哲夫

鞍馬・貴船路にて  
大阪市 林ひろこ

縁結ぶ神へ真顔で手を合わせ  
大阪市 平井露芳

もう後が生えぬ抜け毛にある不安  
兵庫県 野々口ゆう也

格子無き檻に疲れた老独り  
米子市 三戸静絵

やせ茄子の一つ残して秋が更け

ピーポーピーポー紅葉の道をまっしぐら  
大阪市 堀口欣一

病氣して娘の成長を知りました  
大阪市 橋元美穂

ボタンかけてくれる夫の手が温い  
大阪市 岡田ふみ

大儲けするため海を汚してる  
山口県 高崎雀声

日焼けした顔を揃えて初議會  
高知県 山下登舟

焦れてる標的グラグラよく動き  
鳥取市 武田帆雀

お手伝い十能の雪重かろう  
島根県 岩田三和

障子張る女が師走の音をたて  
鳥取県 和井観洋

案山子にも情がほしい一人もの  
倉敷市 大森登竜

猫舌がうどんをすする程寒い  
寝屋川市 立床晴風

いまここで囁託だから出しやばれず  
橿原市 西本保夫

省エネへ冬眠蛙羨まし  
青森県 波ただお

香川県 田井教之

葱きざむ夫 妻の誕生日

神戸市 久保 禎三

猿年の姉に似合いし赤ちゃんこ

広島県 砂田 静佳

彼岸花と孫の言葉は曲がらない

島根県 山本 博也

肩の手が私の意地をなぜ溶かす

★

名古屋 鈴木 可香

何たくらむ妻がお寿司を奢ります

胸の鈴振るときがない恋がない

発言を議長ごつんと受けとめる

椅子をカタカタばんざいへみんな立ち

ゴルフ場むかしここらは甘藷畑

大洲市 米沢 暁明

年越しの仕事残した除夜の鐘

わが趣味をご存じだった贈りもの

山車に乗る威勢白粉塗りたくり

何げなく貰った品は恋なのか

もう見えぬ客を見送る茶の心

岐阜市 市川 鱗魚

ある顔も無い顔もよし春の酒

三ッ指のやり場に嫁の応接間

障子張り替えてこぼれる梅をほめ

灰いろに遠い収支に朱が過ぎる

四海波静かに妻の裏千家

## '80 頌春



# 思い出深い作品

—句集「遍歴」より—

## 香川酔々

好郎先生の作品集「遍歴」が上梓された。瀟洒な装丁と相俟って、珠玉の作品群に、魅了されたことでしょう。

決戦下お琴の糸も切れたまま

筆者が川柳にはじめてふれたのは、43年の夏、羽曳野病院に入院したときである。当時羽曳野どんぐり句会があり、誘われて句座につらなつたのははじまりである。

好郎先生は、川柳に関する講話というより、初心者にもよくわかる噛みくだいた話をされた。そのとき、この句を例に出されたように記憶している。

川柳は実感を大切にすることも必要であるというようなお話であった。

戦争中の一億国民の心情が今でも、いきいき胸に伝わってくる作品である。

焦土から去年にまさる豆の花

川柳塔本誌で、先輩諸氏の百句シリーズを特集したことがあった。

まだまだ筆者初学時代のこと、先輩諸兄

の作品を味読できるような状態ではなかった。近頃になってやっと先輩の方々の作品のよさが、自分なりに理解できるようになってきたような気がする。

この作品などは、川柳の持つ空間的、時間的なひろがりを見せてくれる作品であると考えている。

○トレルマデカエルナと部長から

句会で、何かの例にあげられた作品だったと思う。いわゆる省略の妙の効いた作品である。その中に、サラリーマンの哀歎がひそんでいる。

なるほど、川柳とはこういう風にもつくれるのだと感銘を受けた作品の一つである。

冬越してきたのに金魚さりげなく

百句シリーズの中の一つである。この作品筆者はとてお気に入り、とくに先生にお願ひして短冊に書いていただいた思い出の句である。

これしきのことはと己にはゆるし

この作品も短冊でいただいた。人間の弱さというのか、川柳でしか詠えない人情の機微が見事に表現されているといえるだろう。

妻の夏洗うては干し洗うては干し

この作品は、多分44年の7月の句会で、団扇に書かれていたと思う。先生らしいすかつとした作品である。いかにも夏の感じである。こういう作品は筆者の手の届かない所にある。

思い出の道は避けなし通りなし

句会で、笑いながら、先生が披露された作品である。

一同微笑しながら、耳を澄ましてお話を伺っていたようである。

忠孝という文字ありき墓碑も朽ち

大好きな作品の一つである。この句もお願いして書いていただいた。前述の、冬越してきたのに金魚さりげなくという句と共にいわば筆者の座右の句である。

春雨へ女房と濡れるあはらしさ

この作品のすばらしさが、分かるようになったのは、最近のことである。川柳の楽しさが溢れているような気分させてくれる稀有の作品かも知れない。作れそうで作れない作品の一つといえよう。

◇ ◇ ◇

句集「遍歴」から字はねばならぬことが、たくさんある。筆者には、大切なバイブルといえる作品集である。

# 雑木林にそそぐ冬日

高杉 鬼遊

川柳句集「遍歴」はすこし変わっています。

川柳作品が載っていることにおいては変わりがないのですが、どこが変わっているかと申しますと第一に序文がありません。私を知っています二百冊余りの句集に、序文のないのは見当りません。これはどう云うことかと申しますと題につけた著者の遍歴と一脈通じるものがあるように思われます。それは著者の生活態度であり、信条のあらわれに外ありません。飾ることを最も好まない性格で、ありのままを表白する個性の強さだと私は思っております。「私の句集は私が作る」その精神が好郎フアミリーの色彩を濃厚に表現しております。

題字は次女の今村恵美さんに、原絵は村田瓢太さんに、写真は板尾岳人さんに、選句、校正は笠原吸江、谷垣史好、香川酔々各氏と私と謂う「どんぐり句会」のメンバーに委されました。勿論、最終的には著者の選句で取りまとめられました。あくまで著者一門で出来上ったものです。

表紙の澄んだ緑青は、著者が最も好きな色

で、その色を説明するのに、千日前通りの喫茶店「アメリカン」のソファアを見せに行ったくらいです。

好郎作品から文学的な香りを探ろうとしても無駄であります。詩を意識しないで、ありのままの生活を、ありのままに詠っています。それは著者の歩みの一歩、一歩であり、生活の匂いであります。題の「遍歴」はそんなところから生れたものようです。そこがこの作品の魅力であり、それがいいと思います。変に氣どった作品は作者の本音から遠く離れた、冷え冷えとした形骸になり共感性の乏しいものになってしましますが、掲載句二八六句には著者の一歩、一歩が確実に刻まれてあります。

著者はあまり家庭のことを話されません。勿論奥さんのことを話されたこともありませんが、それなのに、「金婚近し」の頁で三十七句もの饒舌となって結昌されたことは、如何に田満なご家庭であるかが伺い知ることが出来るのであります。そして、「ああ梅里」の十九

句に、手ばなしの兄弟愛を見ることが出来るのです。その兄弟愛の延長は、川柳に関わる多くの教え子におよび、現在もなお蝟集する門下を持つておられることで証明されるのです。あとがきの謝辞で、あえて私達を柳友と呼ばれることは、あたかも雑木林にそそぐ冬日の暖かさを覚えるのです。

著者は女性を愛します。そして親切なのです。それも冬日の暖かきで可憐な野辺の花にそそがれます。男と女、三十八句には著者の前をよぎる女性像を見ることが出来ます。

うしろから見るべきものか 女

冬日は常に背中にあつて暖かいものである。私は何れよりも、次の一句を「遍歴」の白眉としたい思っています。

さてとなれば逃げる卑怯を男持ち

# 愛染帖

## 橘高薫風選

「安兵衛」という名の居酒屋へ入る  
 まるめろの芳香秋を黄色とし  
 前身はのら大昼も夜も寝る  
 不確実時代へ首班渉らす  
 高知市 宇佐 美和子  
 黒船屋いつか減じる女の手  
 霜月や流れていった夢二の絵  
 和歌山市 西山 幸  
 生と死の交渉に行く靴の音  
 また泣いて病棟へ散る枯葉たち  
 柏原市 大峠 可動  
 旅はいま始まる善人の足で  
 新たなる決意男の血の濃さに  
 倉敷市 水粉 千翁  
 静けさに昂ぶる出会いかな茶席  
 大根の艶を泥まみれに見つけ  
 高知市 西川 富恵  
 天と地のどこまでを旅雁の列  
 冬語るとき銀色の月明り  
 和歌山市 松原 寿子

虹指してああ修羅舞いのシャボン玉  
 触れた掌におおらかな海鳴り  
 富田田市 岩田 美代  
 許しては冬のガラスを磨き込む  
 孫出産夜明けの彩がすばらしい  
 島根県 堀江 芳子  
 じいちゃんも孫もはりきる七五三  
 木登りを知らない子らに柿熟れる  
 東予市 小山 悠泉  
 哀しみをかくす化粧と見てくれず  
 菊日と花嫁さんを追うカメラ  
 町田市 竹内 紫鏡  
 求人へ箱根の山は越え難し  
 都心から追われ学者と顕微鏡  
 島取県 鈴木 村颯子  
 土掘っているから俺は賤しいか  
 血だらけのザクロ食う死人が笑うよ  
 島根県 山本 博也  
 人形の何時まで舞えば許される  
 愛の海へ私の小舟沈ませる  
 兵庫県 遠山 可住  
 罪悪を楽しむ空地が残ってる  
 水平線にある影法師と  
 和歌山市 浦野 和子  
 穂薄の銀波へ降りて来るニンフ  
 背信を詩にしてう強かさ  
 兵庫県 辻 文平  
 腹からの笑い忘れし能舞台  
 野芝居の幕間に白い原爆忌  
 青森県 五十嵐 操史  
 酔った振りしている父が許せない  
 からくりを打ち明けられてから男  
 島根県 榊 みどり  
 階段の数に焦点定まらず  
 初恋の友かもしれぬ遊ぶ孫

風邪ひかぬ程度の省エネならできる  
 倦怠期話せば話すほどきしみ  
 羽曳野市 麻野 幽玄  
 呑んだ過去知る盃で断れず  
 草臥着きたるままに干されたり  
 島根県 小砂 白汀  
 殉死するつもりの一人がついてくる  
 四季咲きのバラは多情なトゲを持つ  
 和歌山市 福本 英子  
 地に還る音大きような桐一葉  
 残ってる女見つけた三面鏡  
 島取県 羽津川 公乃  
 一区切りつけて女のさがは燃え  
 これからの人生私の彩に塗る  
 浜田市 佐々木 裕  
 残り火を真婦は耐えてる部屋の菊  
 独り住む炬燵へ沈む老母の背  
 唐津市 新岡 回天子  
 若夫婦俺にはなかったしぐさをし  
 笑われて外来辞典くって見る  
 倉吉市 奥谷 弘朗  
 貧乏くじばかり引いてるお人好し  
 還暦を過ぎててもちゃんと呼べる仲  
 倉敷市 藤井 春日  
 てっちりを囲むは同期の桜ども  
 めぐり会い母子の絆は強かった  
 宋予市 八木 千代  
 埋み火のいつかのろしを待つすがた  
 命綱かすかな揺れも妻の掌に  
 島根県 榊原 秀子  
 芒野は渺茫無我でひとり佇つ  
 息子の背父と並べば父に似る  
 島根県 堀江 正朗  
 葬られた瞳もテレビの方に向け

酒すこし多く風邪気の夜を眠る

西宮市 朝山 千世子

南天が実りわが家の倅深うかに  
嫁の心悟るとこあり秋深む

鳥取市 武田 帆雀

出勤のダツシユ信号に止められる  
シャツター棒担いで中年職見付け

ホノルル市 前山 北海

源氏の血雜婚に薄れゆく嘆き

竹原市 古谷 節夫

故郷の風心地よい便り来る

東大阪市 三宅 哲夫

恋歌を今日も聞いている水中花

島根県 板垣 夢酔

暦には出でない闇の長い世相  
くやしさをかくし見なおす負けゲーム

島根県 木村 はじめ

求人欄あそこもここも五十まで  
べちやくちやと噛んではソバが可愛想

和歌山市 若宮 武雄

大臣をあやつる糸が見えぬだけ  
利用価値まだあるらしい残される

京都市 西森 花村

のたれ案山子へ放哉のこと憶う

京都市 山本 規不風

栄転を祝してからは上司なり

今治市 月原 宵明

大胆な女可愛い正義持つ

兵庫県 中田 白李

義齒入れてから尺八の甲(かん)が出ず

愛乗せて自転車二つの輪がまわる

羽島市 時田 誠一

回らない風車でいたい時もあり

大阪市 北勝 美

神様も眠り給うか月明り

大阪市 大野 武太

夜学子のおもしろい男が成功し

八戸市 小泉 紫峰

風上に置けない一人目で答え

米子市 石垣 花子

老夫婦思い出異れた宿を訪い

旭川市 朝倉 大柏

くだらない話に傷が癒えていく

富田林市 中村 優

てのひらでカッポレ踊る宮仕え

高槻市 若柳 潮花

向きあえば半眼開く仏の眼

川西市 戸田 古方

羽根置むさかいに蝶にしておこう

大阪市 欄 蘭

下り坂女は化粧厚くする

岡山市 出原 敬一

軽蔑の罪が女の鼻にある

大東市 土岐 トク子

一枝添え花に礼節あるところ

京都市 松川 杜的

三十六峰山のない山もあり

尾鷲市 渡辺 伊津志

紫は色良い返事して揺れる

和歌山市 内芝 としよ

本不意な握手をせねばならぬ人

京都市 柴田 英壬子

善行の心に薔薇の咲く日誌

米子市 林 瑞枝

眼を向けただけでゴキブリ身構える

京都市 都倉 求芽

水すまし沼の深さも知らず浮き

倉敷市 中島 彩平

洗濯機も退屈そうな老夫婦

広島県 砂田 静佳

髪染めた娘を外人が振り返り

新宮市 大矢 十郎

嬉しい日右手左手握手する

岡山市 稲岡 正之

あきらめていられるわと夫へ言い返し

宝塚市 吉田 笑女

生え抜きが別の机を持っている

尾崎市 黒川 紫香

旅に出て娘の名と同じ店で酔い

今治市 新居田 胡頼子

戒名というものの僕にも付けるのか

愛知県 池田 香珠夫

忘れなさい忘れるのだと肩を抱く

堺市 高橋 千万子

その深夜裸婦像少し位置をかえ

倉敷市 小幡 里風

大穴をねらう息子へ言葉選る

寝屋川市 江口 度

昔ならここいら辺で腹切るか

八戸市 島田 昭治

休田にミレーの画像消えてゆく

倉敷市 斎藤 通風

ふる里でふる里捨てた話聞く

大阪市 土屋 雅洋

野菜屑いためて留守の夕餉する

米子市 雑賀 美世

野々口 ゆう也

兵庫県 野々口 ゆう也

妻が組む檻の中から定期券

出雲市

園山 栄

政争を見て国が泣く

栗江市

青戸 美佐

しなやかにシंकロナイズ水の精

倉敷市

田垣 方大

別れ道ととうとう好きと言わされた

平田市

久家 代仕男

雲を焼く夕陽悪魔の紋章か

朱子市

桑原 伊都

ふる里の梨に方言が昏に出る

岡山市

川端 柳子

たのしい日お財布空になつてた

唐津市

田口 虹汀

嘘一つつけぬ男にややれぬ椅子

羽咋市

三宅 ろ亭

時雨路だから美事な虹を見る

唐津市

岩崎 実

生きる術軽く流すも覚えいき

唐津市

浜本 久仁於

正座して観念の眼を閉じる

島根県

飯塚 虎秋

母と子のこたつ童話が生きてくる

今治市

矢野 佳雲

名人が歳を思つたとさ敗れ

鳥取市

中森 葉士人

蠅たたき天井までは迫いはせぬ

島根県

西村 早苗

喋らせておいて反論組み立てる

豊中市

満仲 きく子

選ぶのはわたしの勝手女坂

和歌山市

堀端 三男

観光バス着いたところは癌封じ

岡山市

岩道 博友

ある時の妻は他人の顔となり

和歌山市

津田 与史

若き日の悔に疼いた尾氈骨

名古屋市

越村 枯梢

豊年もまあまあ農家同じ弁

岡山市

井上 柳五郎

嘘のない日々清々し老いひとり

岸和田市

古野 ひで

朝もいた酸橘を汁に浅漬に

夏屋川市

小林 鯛牙子

秋の灯の酒は天も地も溶ける

大阪市

藤森 小雅子

話したき事あり野仏笑み給う

松江市

竹内 寿美

洗濯好きの妻へ毎日シヤツを変え

堺市

伏見 茂美

腕まくりしそう建売屋つきまわり

大阪市

横地 雅風

後半の日記は白黒織りなされ

岸和田市

原 さよ子

八方美人みんなに不義理してしま

大阪市

江城 修史

身構える暮しの中の静と動

神戸市

久保 禎三

年賀ハガキ三度数えて三度の数

岡山市

池田 半仙

折る事のみ多き世に疲れ

唐津市

桑原 掬治

公約になかった党の内輪もめ

朱子市

佐伯 越子

ふり返ってふり返ってある母の愛

今治市

越智 一水

国民不在そんな政治へ茶一ぶく

島根県

大森 孝華

心の灯揺れて夜雨の終列車

東大阪市

竹中 綾女

秋晴れの三千院訪い人に酔う

夏屋川市

宮尾 あいき

山村のおみこし見ている杉並木

島根県

山根 峰雪

共稼ぎばあちゃん代理の参観日

和泉市

西岡 洛醉

なけなしを叩けば貧乏神笑う

和歌山市

坂部 紀久子

大きい事云うてる割の銭勘定

貝塚市

行天 千代

硝子戸へちよつと写して孫娘

出雲市

高橋 可保留

嫁と姑譲り合つてる塩加減

和歌山市

坂口 公子

孤り寝と知らず風戸を叩く

香川県

田井 教之

気がつくともんない人秋の風

出雲市

高見 鐘堂

大法会無事おえて飲む酒の味

岸和田市

清野 こう

握る間もなく年金は逃げて行き

唐津市

浜本 義美

木枯しに煽られ灯油又上がり

岡山市

串田 匂味地

いびつな方へ歩いた過去にいじめられ

唐津市

山下 勝一

喜寿の春明治は遠き夢となり

▼前号訂正

修羅出土謎の一つを解くように  
投句光干560 豊中市中桜塚三丁目13-15  
桶高薫風あて (ハガキに三句以内)

# 秀句鑑賞

— 前月号から —

香川 醉々

吊り橋をあなたの後なら渡る

小谷 葉子

夫唱婦隨の典型ともいうべき作品なのでしようか。それとも、その裏に隠されているものがあるのでしょうか。古今東西、女性の心ほど測りにくいものはないようです。この作品が教えてくれるそうです。

留守番のちびちび飲んでる祭り酒

有働 芳仙

今日は、藤崎さんのお祭りです。飾り馬のひずめの音が聞こえてきそうです。上通り、下通りは、雑踏の巷のようです。でも家の中は、みんな出払って、寂としています。留守番は、わたし一人です。ちびりちびりと祭り酒もいものです。オヤオヤ曇って来ました。小雨が来そうです。

親友とあれから呼ばぬ廻り椅子

天野 佳雲

「おい、帰りに一杯つきあわないか。」  
「いや、ちよつと課長会の打合せがあるから今夜は駄目だね。」

「アイツ課長になったと思って、急にオレと付合いが悪くなりやがって。親友と呼んではやらないぞ。」（あの廻り椅子のタタリだな。）

まんじゅしゃげ萌えて思い出持つてくる

天満三千代

#赤い花なら曼珠沙華 オランタ屋敷に雨が降る 濡れて泣いてるジャガタラお春 サンタマリヤのアア鐘が鳴る ララ鐘が鳴る そうです、そうです。西条八十さんの作詩でした。いい曲でした。私もまだ十六でした。多感な頃でした。

わたくしの秋を集めにひとり旅

田中紀美代

旅はひとりがよく。わたくしだけの秋を集めるためには、花野の一隅にポツンとお地蔵様が佇っておられます。

帰命頂礼地蔵尊 此れは此の世の事ならず死出の山路の裾野たる 西の河原の物語

どこからともなく地蔵和讃が聞こえて来ます。わたくしひとりの秋だからなのです。花野にも、すこし秋風がきつくなりました。

何処の誰聞くこともなし釣馴染

浜本久仁於

柳多留拾遺に、よく御存知の  
喰ひますかなどと文王そばへより  
（周の文王は、釣をしてくらしを立てている太公望の人物を知り、これを招くため、釣り

をしている太公望に話しかけ、遂に彼を召しかかえることに成功した。）

があるが、この久仁於作品には、そんな功利的考案は、毛頭存在しない。釣こそ、この句の醍醐味であろう。

銀行ローンで建てましたお墓

堀口 欣一

「御鑑鈔」法主側だけ（今朝の新聞の見出し）相変らず権力闘争にあけくれの東本願寺です。本願寺では、お墓のアパートも経営されているそうです。親鸞上人は、どんなに歎かれていますのか分かります。善人も悪人も往生できるそうです。この坊主どもは、どうも往生できないようです。それに引きかえこの作品はどうでしょう。庶民の心根が、実に素直であるということを実に示しています。ご先祖様は、上人に羨ましがられていることでしょう。

ここ迄が約束だったと云う論理

園山 栄

作品として、すこし固すぎるかも知れませんが、筆者には、びたりときました。ロッキード、グラマン事件、大平擁立と新自由クラブの動き、KDDI会社ぐるみの犯罪？行為。我々国民の腹の立つことばかり。つっこまれると、記憶にございませぬ。よほど頭がよくない連中らしい。ヨシヤか？ヨシヤか？どうです。みなさん理解できますか。この作者が、作品に怒りをぶつけた気持ちがよくわかります。

責任者出て来い!!

# 川柳と人形劇と

(3) — 随想風に

## 山村祐

最後に、川柳も人形劇も、民衆の手によって育てられてきたことに注目してみたい。

昔、各地を流浪していた傀儡師たち。徳川期の人形浄瑠りその他。そして現在も東北から九州に至る各地に残存する民俗的な人形芝居、それらは皆、民衆にとって数少ない娯楽であった。

ヨーロッパの人形劇は芸術活動として現在華々しく各国に栄えている。また、子供のための人形劇、特に東ヨーロッパの社会主義国では児童の情操教育のための指導方策がよく採られている。その一面、大人、子供を問わず健全な娯楽としての人形劇への国家的な指導も盛んである。日本の人形劇の歴史と現状は、これらとはややニュアンスが違ふ。

日本の人形劇はその歴史をみても、様式多様性からも、舞台の効果も、世界的にみても人形劇王国の実体を具えてきたが、そのほとんどを民衆自身が育ててきたことに特色がある。従って大人の観客を対象としてきた。

もちろんヨーロッパに於ても民衆芸術としての人形劇の歴史はある。例えば一六二〇年にチェコのプラハから遠くないピラー・ホラ(白い山)という処で、チェコの反乱軍がドイツのハプスブルグ王家の軍隊に惨敗してのち、チェコの民族的独立が失われていた暗い時代があった。チェコ語はかろうじて地方の農村で余命を保つ状態であったが、民族の生命とも言えるチェコ語を保存して、それによって農村の人々に語りかけ、民族的自覚を持たせる役割を果たしたのは、地方廻りの劇団、特に人形劇であったという。

世界で最も人形劇の普及している国の一つであるチェコにしても、人形劇が文献に登場するのは一七世紀中頃であった。日本の人形劇の歴史はそれよりも更に古くから栄えてきた。そして人形浄瑠りのように、民衆の間にあんなにも広い支持を受けて、しかも高い芸術性を創造し得た例はない。

しかし誠に残念なことではあるが、近代以降は、それら伝統的な人形たちは、現代の民衆の思いを表現する能力を失っている、と言つても過言ではないであらう。

また、戦後特に栄えているヨーロッパ風の人形劇にしても、ようやくヨーロッパの人形劇の模倣から脱しようとしているのが現状であつて、日本の風土と密着した独自の個性的な人形劇を創造し得たとは、まだ言えない段階である。

そして古川柳に対する現代川柳の現状についても、似たような現象があるよつてである。

世界の人形劇が今ではほとんど失つてしまつたもの、庶民や労働者の肌と肌に着して大人のための娯楽として、深く生きつづけてきた人形劇が、数年前までは台湾にあつた。日本やヨーロッパの人形劇が「教育的」であつたり「余りに芸術的」であつたりするよつたな、そういう姿ではなく、例えば初代義太夫と近松のコンビが辰松八郎兵衛の人形を舞わ

した頃よりも、恐らくはもっと素朴に、もっとたくましく民衆に喰い込んでいた姿があったのである。

一九六九年春、人形劇関係のM氏と二人で台湾の民俗学者、呂訴上（ルウスウシヤン）氏の案内を得て、台湾全土の人形劇を観て廻ったが、その訪台第一夜に、私は異様な風景に接した。

台北の下町をぐるぐる廻って、呂さんのあとから露路の入口をくぐった。狭く長い露路であったが、驚いたことに、もうかれこれ夜の一〇時だというのに、三、四百人の群衆がビッシリと露路に詰って溢れていた。そして露路の突当りに丸太でヤグラが組まれていてその上の裸電球の輝く明るい舞台では、布袋戯（ポオテエヒー・中国式の手袋式人形）の芝居が演じられていた。マイクを通しての語りやセリフや歌がガンガン耳に響いて、合間合間には銅鑼や爆竹の音が露路の空気をふるわせていた。群衆は中年以上の労働者風の人たちが大多数で、子供たちの姿は舞台下に僅か四、五人を数えるのみである。時々群衆の間を笑いの波が走り、彼らが今すっきり芝居のなかに融け込んでいる様子が感じられた。興行は昼と夜の二回、夜は夕方七時から一時まで（以前は一二時までであった）台本はキツチと定めたものはないそう、大体のストーリーを定め、あとは即興的に処理してゆく。そしてストーリーは一回で終らない。何カ月も続くことがあるという。

観衆がまた熱心だ。いや聴衆と言うべきかもしれない。語りのアドリブの面白さと、ストーリーの変化の魅力が大きいのだそうである。眼を光らせて人形を眺め、語りや歌に聴き入っている人々。熱心なファンは転々と移る野天の興行を追って移動してゆく。舞台のカブリツキにはそうしたファンがギッシリと詰めてかけている。大半の人々は立って見ているのだが、貸し椅子屋がいて、粗末な小さな木椅子を一回二元（当時一八円）で貸して、結構商売にしていた。

布袋戯（ポオテエヒー）は傀儡戯（カアレエヒー・糸操り人形）や、皮猴戯（ベエカマウヒー・色つきの影絵人形）と較べて最も民衆に密着している。呂さんの説明によると、「総て登記制で、現在（一九六九年当時）の布袋戯の団数（一座は四、五人位）は約六〇〇の登記数で、実際に上演活動しているのは約五〇〇」とのことである。あの台湾島内でこの数の劇団数はちよつと信じられない位である。傀儡戯や皮猴戯と較べて、布袋戯は舞台づくりも操作も比較的容易に行える点はあるにあるのだが。

しかし残念なことに、台湾の人形芝居は今急速に姿を消しつつある。私の訪台時には台北のみであったTVの放映が、その後間もなく全島に放映されるようになったからだ、と聞いている。しかし訪台第一夜のある露路の異様な熱気と雰囲気は今も鮮かな印象として私の脳裡にあるのである。

民衆に密着した芸術、密着した娯楽とは何か。そしてそれはこれから以後どのような姿で興り得るのか、など、考えてゆくほどに頭が混乱してくる。古川柳は確かに民衆に密着した文学であり、娯楽でもあった。これからの現代川柳には、そうした姿は望めないものなのか、どうか。川柳の娯楽的要素を切捨ててゆくことは、民衆文学としての現代川柳であり方として正しいのか、正しいのかが、句会のギャンブル性を責めるのは易しいが、それだけでは問題は解決しない。民衆性は古川柳からの大きな遺産の一つであるだけに、それを今後どのような姿で活かしてゆけるのだろうか。

江戸期の民衆と、現代の民衆との、質的な相違への、しっかりとした見定めから出発しなくては、この問題は恐らく解決を示してはくれないであろう。

川柳の近世と近代との境には、深い深い割目がある。その割目の深さに気づかない人や無視しようとする人々がもし居たら、やがてその割目に落ちこんでしまうのかもしれない。

古川柳と現代川柳の性格の相違の深さを見定めた上で、どうしたらこの割目の上によき橋を架け渡すことが出来るのか。そうした問いかけが、今後の現代川柳人への重い課題として私たちの前に横たわっているのではないだろうか。

# 傘寿万歳 夫婦愛のドラマ

— 川柳句集 “夫婦” の読後感

東野大八

ことわざに「縁は異なるもの味なもの」とい  
うのがある。これは一組の夫婦を指したものと  
とみる。一人の人間が生を享けたとき、その  
配偶者が一体誰であるのか、神ならぬ身の知  
る由もない。ところがいつのまにやら凄じい  
人間ジャングルの中から一人対一人の夫婦が  
出来る。「親子は二世夫婦は二世」というそ  
んな太いきづなに結ばれた、この伴侶の深い  
縁（えに）を人間はどう解釈すればよいの  
か。縁は「異なるもの」「味なもの」という不  
可解な極な感嘆詞しかでてこない。

もつともこうした夫婦にも、後家・やもめ  
・三下り半の不縁の間はつきものである。し  
かし、そうした婆婆の冷たい仕打ちをよそに  
「おまえ百までわしや九十九まで」といふ  
髪の間髪まで添い続けることができたという  
ことは人間最高の幸せだといふべきであらう。  
新内の文句ではないが「縁でこそあれ末かけ  
て」である。この果報には、貴賤上下の隔て

はなく、富や名譽と何程のことやあらう。

市場没食子・市場カネ女共著の川柳句集夫  
婦を手にしたとき、私はその渋い装禎と、コ  
クのある夫婦の文字のうつくしさに、以上の  
ような感慨にとらわれたことである。夫婦  
この文字の底には、腹郁無量夫婦愛の情緒と  
ドラマがある。いいタイトルである。そう感  
銘したのも私自身が、銀婚式も過ぎ、成婚半  
世紀の金婚式という夫婦冥利につきる道標を  
眼の先にしてしているからであらう。

この句集は、市場御夫婦抱き合わせの構成  
で、没食子作品は昭和二年から現在までの彪  
大な句数を整理し、戦前・戦中・戦後上中下  
と区別され一〇六句。カネ女作品はそのあ  
とに八六句が続いている。夫君がどつかと大  
胡座をかいている下の、いわば座ぶとん代り  
というスペースの配分である。そのかわり本  
の前後の見返えしには、一筆描きの竹と草花  
がカネ女のサイン入りでサラリと心憎い彩り

を添えている。

顔までが夫婦似てくる面白さ

老人も二人きりになりたい日

没食子  
カネ女

この二句が、双方の作品の巻頭にある。い  
わばこの口あけの二句が、この句集の味覚を  
遺憾なくあらわしている。通読していくと、  
夫婦の「顔」ばかりでなく、その作品の作句  
傾向まで丸つきりウリ二つである。似たもの  
夫婦とはよくいったものだ。

とにかくじつくりと一句ずつを鑑賞させて  
貰っていくと、平凡な庶民の生活ドラマが、  
結婚生活五十余年という永い年季のさびが、  
なんのてらにも気取りもなく、淡如として描  
き出されている。この肌合い濃い句毎のあた  
たかさは、一体どこからきたものかと考えて  
みたら、それは教科書用の大きな活字のせい  
だと知れた。句と活字がまさに一体化し、遺  
憾なく融け合っている効果は、この句集の大  
きな成功であると賞讃したい。

苦勞とは思いませんと縫う妻よ

針の尻押しで儲ける貯金帖

湯豆腐で妻の縫うてるそばで飲み

銀婚の今なお妻の手内職

扇機風の代りを妻がまだ勤め

没食子  
同  
同  
同

時々は妻へ五十の身があまえ  
妻つれて今度は来たてい中禪寺

同 同

「カネ女は三人の子育てのかたわら、自宅で和裁の仕立てと教授で、内助の功をしてくれた」、戦争末期には学童疎開の長男と、縁故疎開の長女を呼び戻し、末っ子をつれて三重県の赤目口へ疎開した。終戦後帰阪してまた共稼ぎが続いた。その上長寿だった私の父（九十二歳没）の面倒を見てくれた。余生は彼女への償いでありたいと思っている」

この句集の「あとがき」で没食子さんはこう記し「路郎先生にめぐり会え、御指導をうけた賜もの」とその柳歴を詳述したあと、

「川柳の道に入つて五十余年、サラリーマン生活五十余年、古稀も喜寿も過ぎ、とうとう数えて八十歳、即ち傘寿になった。妻も古稀を過ぎてしまった。（中略）句の良否は別として、私共夫婦の句集が出来て、うれい。どの真にも、思い出の句がある。その頃が目頭に浮ぶし、句のモデル的存在になつてくれた人の顔も映つて懐しい、しのび草である。川柳をしていてつくづく良かったと思う」

以上のあとがきから、没食子さんというお人柄が、濃厚篤実な好々爺を連想させる。このことは中島生々庵先生の序文の中にも「謙讓無類」と表現されていることにも偲れる。

ついでながら、この生々庵先生御夫妻が、この句集刊行のため、先生が序文を、題字を小石夫人が引受けられ、「小石老女もせつと習字をはじめ、出版間際まで一寸でも上達するように、私が序文の原稿を書いている傍で夜

なべ作業がつづくのである」と序文にある。あたたかい趣味同好の友情の心証が感じられるほどは笑ましい。

ところでこの句集の紹介文をいま書いている私だが、没食子さんと面識はあとにも先にもただの一回切りである。戦後十年経った頃、私が上阪した際、忝けなくも麻生路郎先生と御令嬢の梨里さんのお迎えをうけた。そのとき同行されていた一人の紳士が他ならぬ没食子さんだったという次第で、簡単な初対面の挨拶を大阪駅で交しあっただけの仲である。

とにかく、この句集にある没食子さんの履歴で、私の身辺と若干の共通点や、幾つかの他生の縁もあり、加えて「夫婦」というタイトルに、没食子さんの肌合い濃い川柳作品にこころひかれて、覚えすべんとつたという次第である。

この句集をじっくり鑑賞させて頂きながら私の感興をそそられた没食子・カネ女さんの句を以下再録させて頂いてお別れしよう。のんびの亭主と、針一本の内職で家計を支える女房、この点もそっくり私夫婦に似ている。

吸い物の蓋で飲まされ踊らされ 没食子  
返盆に困りおでこを叩いて居 同  
三十年勤続黒のネクタイで 同

退職金売げた頭をなでてみる 同  
引き継ぎをすませ立飲みして掃り 同

酒樽と写せし頃のわれいとし 同  
破れる網で秋刀魚を焼いておき 同

ああ夢でよかつた妻も子も寝てる 同

同

序文  
題字  
装画  
編集

中島生々庵  
中島 小石  
市場カネ女  
不二田二三夫

▼句会用のは  
かは残部少々  
となりました。  
一千円送料共

子のことで夫婦が暑いのに喧嘩  
風呂へなといつて淋しきまきらさん 同  
妻老ける老けることへもいかぬまま 同  
妻達者粗末に使うことに馴れ 同  
気を使って子は子で暮らすいじらしき 同  
大空は曇る偽わり多き世や 同  
夢だけは大きく持つて子を育て カネ女  
もう飲まん約束して二日酔 同  
一生の不覚主人は飲んだくれ 同  
帯一本買つてもくれずこき使い 同  
女関に男の下駄もいらべとき 同  
むつりと黙つても眼は優し 同  
喜寿祝い主人の元氣妻の幸 同  
ちんまりと肩を寄せ合う老夫婦 同

## せんば川柳社主幹

### 岡橋宣介氏遺句集

#### 「熊野」発刊におもう

菊沢 小松園

私は嘗てから何時も思っていることながら遺句集というものは編集に当る人々の努力も氣遣いのいるものだがその余りの故人を追慕する情の深いためか、時々、程度の過ぎた蟲眞の引倒し氣味の過ぎたるは何とやらと思つたこともある。

遺句集という性質上編集は数人以上の人達の協力に依る場合が殆んどである。従つて各人各個の多少の思い方に差異もあり、またずれも出る。それが共同の作業をするのだから熱心の余りの事とは言え遺憾なことと思つ場合だつてある。その混沌さがこの種の句集の上に陰りとなる。この点この「熊野」の上には全く杞憂に終つたことを喜ぶものである。その装丁にも出来上りの整然さにも遺句集として近來の圧巻であろうとおもつ。編集に当られた方々の努力の賜と深い感銘を受けた。この句集を手にして沁々惜しい人を亡くし

たと思つ。風采も内容も俱に紳士であり、曾てのいわゆる毒舌も近來熟成して銀いぶしに包まれて、風袋の中に錐のきらりと光る、床しき、老來病を得てから家の近い関係もあつて阿倍野筋の市場へ奥様と買物と一緒に來られ私方で宣介さんだけ待つて居られ、いろいろ世間話をして帰られ、ただ病人の暗さのないう明るい表情であつた。それが数年前からいよいよ歩行困難になられて奥様に押されて車椅子になり、それでも肩のこらない世上の話で川柳の話は減多に出なかつた。病氣の性質上から血色もよく、あの堂々たる体格は奥様には大変だつただらうと思つ。

大阪市民川柳大会の下準備の打合せ会などの役員会にはいつも奥様の介添えて出席されていたその責任感はいつも市の文化委員も感謝して居た。市民川柳発起人の生残り一人として氣になったのだらう。私も委員の一人

としてよくお目に掛つたものだった。その几帳面さはこの句集の中に川柳人への悼句が年を追つて載せられているのでも判る。40年路郎一同じく水府、42年玄武洞、43年すゝむ、44年三太郎45年紋太、45年小太郎、45年村雲同白柳等々。広い範圍の川柳人へ適切な追悼吟を上げておられる。句の用語も奔放で不羈誰憚からぬ解放されたものである。

精子、交り、股、性器、魔羅、乳房、交尾、氣の弱い者には到底自家乘籠中のものとして使駆出来ぬ句語を好んで使つて居られるのも目を引く。又、多年の俳人としての蘊蓄のある語も隨所に見える。

税重しいんいんとして除夜の鐘

地球から人ら疲れて落ちまいとする

税吏去り胃に突つぱりしもの一つ

一月一日鬱然とある酒の壘

一月四日そろりそろりと婆の風

一月五日ふんぎりつける盃を持ち

十日或われも衆愚のひとりにて

簡単な妻の化粧をあわれとも

鍵穴を覗くとき一匹の人間でいる

十二月さつぱりワイヤが酔つてゐる

フアスナーをいたわりながら閉める老

履歴書の要らない職に梅雨が来る

叱られた母は小さく棺の中

梯子酒うまし人世観ゆれる

人形の股 起伏無し千濁ゆく

心引かれる句を抜いていると、その人が仄

かに影像となって映し出されていよいよ懐しく思い浮べてくる。行年八十二歳、恵まれた生涯に何の未練は無かったであろう。故人と俱に残られた奥様の俸せを祈るものであり、

## アノ梅の記

不二田 一三夫

宣介大人の御冥福を心から念じてこの「熊野」句集の読後感とする。合掌多謝。

悼句

小松園

暑さ寒さの苦もなくゆつくり頬をなでる風

▼句集「熊野」(定価二千円)お申し込みは〒545大阪市阿倍野区北畠三のの一〇九「せんば川柳社」あて。

さえ現わしている人もいた。実はほくも拙著「川柳寄席」からではないか?と思うような句に二度も三度もお目にかかったことがある。しかしほくの場合「オレの寄席の句も売れるんだな」と、うれしくおもったことである。

おそらく他人の句をそのまま写しとって、自分のものとして発表する人はいないと信じたい。新しく川柳をはじめた人に、このような話をしたら、もうこわくて川柳する意欲をすてしまいかも知れない。

「そんな心配はせんでもよろしい。だからこ

そ選者がいるではないか」  
ちよつと巧い句が出来たら、これは誰かの句ではないか?と自信が持てず、下手な句が出来ると「これはまちがいないオレの句だ」なんてそんなことで胸を張ってはいけない。  
「川雑」時代、路郎選で天位になった句が某地方の小集で天位になったのと同句だと文句を云ってきた人があった。あるいは盗作だったかも知れないが、全国の隅々の句会の天位の句まで選者の責任にするのはナンセンスである。

こんな例外もあった。雑詠や課題吟でよく入選する新人がいた。ところがこの新人の作品は全部盗作だと、注意してくれた人があった。そこで投句してきたのを調べると十句のうち三、四句は著名作家の作品で、あと六、七句は自分の句らしかった。こちらも調べるのに時間がかかるのでこの人の投句は全部没にした。

世の中にはエライの人もいるもので、「あの句をなぜ全部ボツにしたか、あの投句の中には有名な人の作品もまじっているのやで」つまり作品さえ好ければ誰が出しても載せるべきだというのだ。歯には歯というがこの人には歯がたたなかつた。

最近「××月号の××さんの句、あれは私の句集に出ている句だ」と、このような被害届け?がときどき耳へはいつてくる。  
または「私の句ばかり三句も○○さんが出しています」というのもある。なかには怒り

## 雅号ぶつちやげばなし (181)

あせい



藤村 亜成

ふじむら

就職して間もない頃だから、十年余り前になりましようか、読み書きの疎い私に川柳を奨め、その気になった頃をみはからって命名してくれたのは、実父高鷲亜鈍です。亜鈍の亜に、私の本名、誠の言偏を外し、亜成と名付けてくれたものと単純に理解していましたが、父としては鈍が成る(成功する)ように、との気持ちが入められていたようです。ところが相変らず作句が苦手で、熱があがらず、鈍が鈍している私ですが、それでも日常の生活の中で、次第に巾を効かせてきているこの雅号を、最近では愛着を持ち、これからはもっと大切に扱っていききたいと思っています。(会社員 三十四歳)

年賀ハガキ

高橋 千万子 選

ぜろ歳も家族となつて賀状くる  
 寄せ書きの年賀ハガキで福笑い  
 寝床から年賀ハガキの音を聞き  
 年賀ハガキ貰うも出すものしみて  
 ライバルの年賀ハガキで肩がこる  
 大猿の伸でも年賀状は出し  
 年賀ハガキを送つて恋心を示し  
 年重ね人の身哀れ減る賀状  
 年賀ハガキ予備もなくなる程出世  
 また一人年賀から消す芳名簿  
 その人の個性年賀に生きて来る  
 凝っている年賀ハガキはとつておく  
 脱都会年賀ハガキで知る住所  
 家運隆盛年賀ハガキの高が増え  
 老友の賀状の来ない肩落し  
 書き初めを年賀状でするすれ違い  
 古りし恋秘めたまんまで書く賀状  
 まき餌として年賀ハガキ雑魚にまき  
 年賀ハガキ去年と同じ誤字でくる  
 年賀状ポストの口がせますぎる  
 いも版の年賀ハガキが喋りだし  
 賀状筆止めた故人の住所録  
 新年へ年賀ハガキと云う苦業

買	賀	添	細	宛	松	元	義	風	義	雀
い	賀	え	い	主	す	旦	理	変	美	声
ず	ハ	書	緑	の	ぎ	に	で	り	郎	也
ぎ	ガ	き	年	顔	は	い	出	な	凡	博
た	キ	の	賀	を	げ	ろ	す	年	九	美
年	短	一	ハ	浮	た	と	年	賀	郎	也
賀	い	行	ガ	へ	顔	ど	賀	書	也	
ハ	文	友	キ	て	は	り	賀	く		
ガ	に	の	で	大	け	と	賀	る		
キ	あ	声	切	切	く	な	賀	る		
ハ	る	を	に	書	る	年	賀	く		
ガ	ぬ	き	の	き	く	賀	賀	く		
キ	く	き	せ	く	く	賀	賀	く		
ハ	み	を	の	せ	く	賀	賀	く		
ガ	ど	の	せ	て	く	賀	賀	く		
キ	り	の	声	操	子	賀	賀	く		
ハ	の	年	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	当	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	選	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	が	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	出	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	た	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	孫	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	の	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	声	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	操	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	子	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	保	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	夫	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	三	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	和	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	宵	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	明	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	回	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	天	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	子	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	虎	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	秋	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	裕	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	夢	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	醉	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ハ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
ガ	酔	賀	賀	賀	賀	賀	賀	く		
キ	酔	賀	賀	賀	賀					

吟 題 課

お神籤と逆の運勢待ち構え 一路  
 趣味として読む運勢は面白し 可保留  
 運勢は今年白です鈴を引く 木魚  
 男なら良かった手相見慰める どんたく  
 運勢欄喜ばせたり叩いたり ろ亭  
 運一つ捉えた女のヒット曲 裕  
 運勢に頼る男の浪費癖 悠泉  
 運勢を見る暦買う文化人 花子  
 運勢が上昇雲を踏んでいる 満津子  
 運勢を女見る灯が消えぬ思案橋 可住  
 運勢を女の胸にたたえんとく 可住  
 亡夫にはすまない其の後の運開け 静枝  
 運勢は天の力と積む努力 代仕男  
 運勢はあなた次第と占師 勝一  
 運勢も時の流れに乗って来る 軒太楼  
 ローソクの灯で運勢の影を読む 凡九郎  
 運勢を変える貴方のエネルギー 凡九郎  
 運勢に頼らず生活慎ましく 逸名

運勢を十指に掴む呱呱の声 博也  
 運勢は気にせず目出度い日を迎え 千代香  
 運勢は神に任せてある安堵 千代香  
 酔っている客に占いおまけする 大柏  
 七転び八起き運勢にさからわず みどり  
 末広がりという運勢を信じきり 里風  
 福耳と笑顔に運勢ついて行く 操子  
 努力する背に運勢乗ってくる 満津子

猿

白井 三林坊 選

無事という大吉に気がつかず  
 正月は猿も持つつけてくる 義美  
 ホス猿と言わんばかりの歩きよう 木魚  
 見張りする猿はホスへの夢を持ち 武水  
 人間不信も一度猿に戻りたし 佳雲  
 猿まわし今日の噂はどの辺り 本蔭棒  
 どこやし三猿というカシコトバ 古方  
 猿真似はすまいと決めた暦割ぐ 大柏  
 宰相も見習えと退く猿のホス 天彦  
 猿芝居猿の目元が寂しすぎ 伊津志  
 ホス猿も定年霧の深い山 白李  
 巫礼の身振り手振りの猿芝居 喜洗  
 一本の紐があるから踊らされ 枯梢  
 リタ嬢の芸で湧かせた天王寺 露芳  
 猿真似の人の笑を気にしない 干子  
 猿の年床の置物猿に替え ますえ  
 慢心の猿がすべった木にすがる 裕  
 人間を真似ホス猿にゴマをすり 花子  
 猿いつか洗って食べることを知り 登美也  
 猿犬の夫婦で金婚とうに過ぎ 句味地  
 ホス猿が小手をかざして見る人出 代仕男  
 三猿となって浮き世の外に住み どんたく  
 温泉に入る猿も持病があるのかなりこ

三猿を通して居れぬ社のピンチ 綾女  
 風の音野猿はきつと身構える 方大  
 野獣の眼ベットの猿がふと見える 一路  
 お芽出とう孫の賀状の猿烏帽子 軒太楼  
 猿芝居生きるでだてのひもがつき 勝一  
 三番叟の猿が新年おめでとう 忠三  
 今年こそやるぞ猿年僕の年 悠泉  
 木の上の猿に人間おちよくられ 隆子  
 檻にいる限りは生きていける猿 素身郎  
 猿の出た噂を聞いた無人駅 無人  
 猿知恵を笑える君と思ふかい 凡九郎  
 猿の目に心読まれる飼育人 規不風  
 ホス猿が寝そべっている山は無事 久仁於  
 三猿になれずホスにもなれず老い 右近  
 猿年をこまめに動くのが取得 洛醉  
 公園の猿の視線は山を向き 豊生  
 色々の猿が舞い込む年賀状 弘朗  
 古里へ帰れぬ猿の大欠伸 軒太楼

# 初歩教室

## 題 一 折目 一

### 本田恵二朗

誇りや、倅せや、悲しみや、悩みやを織り交ぜた人生街道が延々と続いてゆく。それらの体験によって、鍛えられ洗われた心は、研ぎすまされて、純粹なものへと成長し、進化し、安定したものとなるのではなからうか。私はそうありたい、そうなりたいと念じながら年輪を重ねているが、人生ドラマは必ずしもハピエンドとなるとは決っていないものかも知れない。そこで、ハピ―エンド街道へのハンドル捌きの習練をせねばなるまいと思う。句を生むための真摯な習練が、そのハンドルになってくれているのだと、いつの頃からか感じ始めて、現在では、そう信じて疑わない心境に到達しているつもりである。

アイロンの折目が嫁の真がこもり  
 (アイロンの折目が嫁を見直させ)  
 ふだん着の折目に匂うお人柄  
 折目切れ目守って家風に生きた母  
 (母藏と家風の折目守り抜き)

句味地  
 テル  
 同

老いてなお姑の折目は継せもせず  
 ここまでと折目をつけて本を閉じ  
 (本閉じる折目も秋の夜の長さ)  
 肩書が折目正しい顔にする  
 Gパンも嫁く挨拶折目つけ  
 ちり紙の折目にこもる心付け  
 校長の折目正しい隠し芸  
 妻病んでズボンの折目二つ出  
 折目無い札が出て行く月給前  
 商談にも折目を見せる浪花っ子  
 (商談へ折目忘れぬ浪花っ子)  
 折目通り袴を娘たたみみる  
 (折目通り袴たためる娘に育ち)  
 彼女出来たらしくズボンにある折目  
 (恋知つたらしくズボンにある折目)  
 花婿に折目正しくある礼儀  
 (花婿の折目狂いのない安堵)  
 うつむいて折目を正しい話  
 ハンカチの折目いじる娘気に喰わず  
 (ハンカチの折目をいじる下心)  
 明治生れ折目つけ過ぎるとまれる  
 (折目をつけ過ぎて明治うとまれる)  
 折目正して仲人待つ晴れの朝  
 (晴れの朝折目正して仲人待ち)  
 如才なく折目をつけて仲人役  
 (仲人さん折目折目へ如才なく)  
 後輩の正しい折目に期待する  
 教養中元折目忘れぬ年賀状  
 暮暮中元折目気になる姑が急ぎ  
 (中元暮暮折目気になる姑である)  
 姑がいて何かと折目つけてくれ

伊都  
 同  
 佐代子  
 同  
 胡顔子  
 同  
 大鷹  
 同  
 八文銭  
 同  
 保夫  
 同  
 可保留  
 同  
 千子  
 同  
 武太  
 同  
 美也  
 同  
 美佐  
 同

(ことごと)に折目をつけてくれる姑  
 祝電を打って折目もつけておき  
 (祝電も打って折目を狂わせて)  
 紋付と袴を心に着せてみる  
 のし袋お札に折目のないところ  
 性格が袴の襷を崩さない  
 (崩さない袴の襷に見る育ち)  
 浪人の苦節折目のないズボン  
 (浪人のズボンに折目見当らず)  
 (浪人のズボンに折目など要らず)  
 親しき裸の中にある折目  
 紙人形母の折目に生かされる  
 樟脳の匂う折目に身の硬さ  
 (樟脳の匂う折目がかしこまり)  
 ワンテンポずれる折目まだ守り  
 (ワンテンポずれた折目をにくめない)  
 挫折して折目も次第消えてゆく  
 (挫折してからの折目がすり切れる)  
 元旦だけ折目正しい朝の膳  
 (元旦だけ折目正しい膳につき)  
 思い出の所にしかり折目つけたまま  
 (思い出の真についている折目)  
 折目よく義理立て通し寡婦疲れ  
 折目ある義理が一票さげてる  
 分家には遠い折目を本家持ち  
 (さすが本家分家にはない折目)  
 宗匠の折目高には近寄れず  
 (宗匠の折目近寄り難く見る)  
 断るにしても折目はつけて置き  
 折目だけはつけねば家の恥  
 許す気のやはり折目はつけたがり

同  
 紀久子  
 同  
 小雅子  
 同  
 勝美  
 同  
 同  
 同  
 柳五郎  
 同  
 英子  
 同  
 なみ  
 同  
 軒太楼  
 同  
 利美  
 同



大 萬 川 柳

「区切り」

入選発表

選者 川村好郎  
投句総数 三百十一句  
入選 四十八句

和歌山 寿子  
区切っても愛の深さは断ち切れず

大阪 文秋

後を借るつもりきちつと返しとく

大阪 満津子

人の世の区切り区切りに酒を酌み

大阪 真砂

ひと区切りつけてくつろぐ耕耘機

尼崎 利美

出すものを出さず区切りつけたがり

平田 代仕男

定退を潮に帰農を区切りとす

菟屋川 度

夫婦旅十年毎の竹の節

大阪 柳志

区切りつけました喪服も脱きました

和歌山 としよ

いやな年区切りをつけよと除夜の鐘

大阪 ふみ

母のお茶区切りの時をわきまえる

大阪 美恵

成長の区切りのたびに金が必要

和歌山 幸

愛憎の区切りへ冷えて着く手紙

宝塚 静馬

この辺で区切りつけたい腐り縁

和歌山 武雄

晩酌が今日のいくさへ区切りつけ

米子 伊都

埒あかぬ話へ区切りのお茶にする

米子 美世

古手紙焼いて心の区切りつけ

藤井寺 吸江

万歳三唱それから幹事腰を据え

和歌山 紀久子

区切りつけたはずの心がまだ揺れる

兵庫 可住

正確に区切りをつけて陽が沈む

東大阪 美子

ひと区切りついた夜なべの茶がうまい

米子 千代

巢立たせた翼にふれぬ距離をとり

奈良 カズエ  
辞令一枚ただそれだけでつく区切り

倉敷 里風

区切られた網目雑魚の自由主義

奈良 本蔭椿

内職の区切りついたか灯が消える

米子 越子

人生の区切り家裁の中でつき

大阪 蘭

区切りつけて内職米を研ぎ

倉敷 素身郎

否応なしに定年が来た区切り

名古屋 枯梢

区切られた二DKに縮こまり

菟屋川 あいき

妻と母心の区切りは出来ている

和歌山 英子

失恋の区切りをつけるに嫁くという

和歌山 英子

句集出し次の区切りへめざす意気

大阪 弘生

青写真出来て予算へひと区切り

岡山 千代香

新しい年へひそかに区切ること

岡山 千代香

橋のない川に二人が区切られる

米子 雄々

つまずいた石が区切りをつけたい

米子 雄々

定年が浮気へ区切りつけさせる

米子 雄々

許されぬ恋の区切りがまだつかず  
ブロックで区切り冷たいご挨拶  
佳句  
東大阪 喜洗

領海を区切る 魚の知らぬこと

笠岡 忠三

定年の区切りへ家計のしかかる

富田林 花梢

砂文字が区切りのつかぬ人にする

和歌山 寿子

区切らずにあなたの余韻抱いて寝る

大洲 暁明

ベル一つ打ち切る組と残業と

守口 右近

六、三、三、区切って伸びる芽を育て

堺 千万子

負けるが勝ちと早々に区切り

人ノ句

一年の区切りに短い大晦日

大阪 道子

地ノ句

富田林 花梢

海鳴りが区切りのつかぬ今日にする

天ノ句

年月で区切れぬ悔を鞭とする

西宮 百酒

選者吟

仲裁が区切りをつけた気で帰る

昭和五十四年度

ベストテン決定

一 百梅里賞一〇、五 西宮

二 満津子 梅里賞一九、〇 大阪

三 寿子 一八、五 和歌山

四 道子 一七、五 大阪

五 花梢 一六、五 富田林

六	千代	一六〇	米子	一三	優
七	柳志	一五五	大阪	一四	吸江
八	和子	一五〇	和歌山	一五	文秋
九	美幸	一三三	八尾	一六	あいき
一〇	武雄	一三〇	和歌山	一七	右近
一一	小雅子	一三〇	大阪	一八	弘生
一二	真砂	一二五	大阪	一九	美子

一一	富田林	二〇	英子	九、五	和歌山
一二	藤井寺	二二	紀久子	九、五	和歌山
一三	大阪	二二	夕花	九、五	八尾
一四	寝屋川	一〇	五守口		
一五	五守口	九、五	大阪		
一六	東大阪	九、五	東大阪		

昭和五十五年第二回  
「片手」 三句以内

川柳塔社常任理事会 (12月3日)

本年度納めの常任理事会である。さすがに師走とあって何か落ちつかぬ心齋橋筋だ。岡山の浜田久米雄氏が意欲的に同人を五氏ご紹介してくださったことを報告する。

栗氏と薫風氏が川柳塔社の句風について討論され、はじめて常任理事会らしい空気に包まれた。かなり突っこんだ論議となったが、両氏がかつての明和川柳会時代の師弟の關係上、険悪さはなく、むしろサバサバとしたやりとりで終始された。

主幹ご夫妻のお心づくしでビール、すしが机上に盛りあげられ、そんな雰囲気の中での論戦だから明朗なものだった。栗氏が五月に句碑を建立されることが明らかになった。あわてたのは編集部だ。最初は三月の子定だったそうだが、十二月現在、原稿がなにも書けていない。薫風氏と岳人氏が運動中とのこと。

碑石も場所も決まっているそうだから次号で全貌を発表できそうである。一月十三日の「おめでとどの会」の案内状

は栗氏がお世話くださる。参事、常任理事、理事、句会部、編集部の理事以外の方もふつてご参加ください。(次回常任理事会は2月4日(月)5時から)

出席 百酒・栗・形水・太茂津・水客・紫香・潮花・薫風・与呂志(朗月も出席)・生々庵・岳人・小松園・一三夫

大萬川柳・花梢さん浮上

藤岡花梢さんが大萬川柳の第五位で堂々選者権を獲得された。この人にしてみれば第五位は不本意な順位かも知れないが、54年度は薄水を踏む進撃だったようである。

54年度の第一回は第二位だった。その後第六回までは五位から七位まで、上位進出を期待させたが第七回には第十一位に落ちた。第八回、第九回はまた九位を奪回したものの第十回は第十二位、第十一回は第十一位と射的距離にふみとどまるが、最終回あと一回きりということまで追いこまれた。

さすがに根性の人、花梢さんは最終回で逆転に成功した。佳句一地位と、四点をもぎとり堂々の進出は見事だった。(不)

第二十七回

大萬川柳大会

日時 二月二十四日(日)  
午後一時から  
会場 大萬

詳細は川柳塔二月号に発表  
今から繰合せ)出席下さい

主催 大萬川柳会  
後援 川柳塔社

NHK川柳募集

課題「盃」 川村好郎選  
投稿先 ハガキ三句以内 締切 一月十日  
〒540 大阪市東区馬場町  
NHK近畿本部「老後をたのしく」係

発表

一月二十六日(土) 午前九時十五分・ラジオ第一放送(全国放送)  
「老後をたのしく」の時間

締切 一月二十五日  
第三回  
「特別」 三句以内  
締切 二月二十五日  
以下略

投句先  
〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七  
藤井二三万 大萬川柳係

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

・神田仙之助・渡辺蓮夫諸氏である。理代川柳の鑑賞に東野大八氏と橋高薫氏が筆を執っておられる。番傘の岸本吟一主幹が、本社の河野君子さんの「都市砂漠ひたすら信じるものを抱く」を推薦されている。さすがに出版社の発行だけに安い(千三百円)東京都千代田区神田神保町二の十七・有斐閣(全国書店にあり)

富士見二六一九・雄山閣出版編集部川柳年鑑

句拝辞。懇親宴、宿泊など2月10日までに。岐阜川柳社。

▼「川柳新聞」(11月5日付)の「川柳歳時記」に不

二田一三夫氏作「辛らつな批評は客席からアクビ」が故桂枝太郎師の作品とならんで発表されている。発行所一九一東京都日野市多摩平一六三の一・川柳新聞(一年間三千円)共・毎月五日発行)

▼紀水川柳会(橋本市)から「山柿」創刊。会長は岸本木魚氏、事務局に森脇善太氏(わかやま吟社・本社同人)和歌山に川柳の灯がまた輝やいた。

▼石曾根民郎氏(松本市)は頼原退蔵著作集(中央公論社)へ「御縁に触れて」を執筆、その他「出版界にいつも棲息して欲しい奇人」という快筆をふるい活躍されている。

▼故岡橋宣介氏追悼句会に(11月18日)栗・小松園・形水・薫風・柳宏子・凡九郎・岳人・寿馬・鬼遊諸氏が本社から出席(鬼遊報)

▼故川上三太郎氏夫人八千代さんが11月18日老衰のため逝去された。一合掌。

▽同人の動向△

▼西尾栗氏(八尾市)の句碑除幕式が五月十八日(日)に行われる予定。

▼「川柳のすすめ」鑑賞と作り方が有斐閣から発行された。編者は浜田義一郎

▼尼緑之助氏(出雲市)が句集を出す準備をされている。

▼中島生々庵主幹が日川協の二代目理事長に就任されたことを読売、朝日、大阪日日新聞などで大きくとりあげ川柳界の黎明近きを告げるかの感があった。

▼前号紹介の「川柳年鑑」の巻頭読み物は東野大八氏が「川柳が直面している今日と明日」を執筆、好評である。なお一九八〇年版川柳年鑑作品を募集。一人三句一希望の選者を添記。選者は去来川巨城・斎藤大雄・佐藤正敏・鈴木可香・高橋放浪児・吉岡竜城(受付期間・五五年四月末日まで。送り先一〇二千代田区

▼岐阜川柳社創立25周年記念川柳大会が3月9日、同市神田町四丁目、日の丸会館で開かれる。題/氣力/天才/雲/交差点/鮮やか/人形/民宿/洋酒/筆/爆笑/事前投句/期待/投る。

▼西尾栗氏(本社副理事長・日川協常任理事)の句碑が八尾市の八尾公園に建立される。除幕式は五月十八日(日)に予定されている。

▼麻生霞乃先生はますますお元氣とのこと。薫風氏や柳宏子氏がおたずねしての報告である。

▼「川柳のすすめ」鑑賞と作り方が有斐閣から発行された。編者は浜田義一郎

たいしょうの会

(イロハ順)

- 榎谷 寿馬
- 高杉 鬼遊
- 室田 千尋
- 越智 禎
- 寺尾 俊平
- 森本 夷一郎
- 代表幹事
- 岩井 三窓
- 中尾 藻介
- 橋高 薫風

頌 春

昭和庚申元旦

井阪東天紅

▼浜田久米雄氏(岡山県)から「最近甘いものが好きになり体調は上々で五キロもふえ、川柳の同志獲得に力を入れていますと。

▼児島与呂志氏(藤井寺市)は12月5日、同市教育委員会からの依頼で藤井寺市老人ホーム「松水苑」で約一時間半、老人大学講座で川柳の講演をされた。なおこの機会に川柳を奨める熱意を持ちつづけていくとのこと。

▼傍島静馬氏(宝塚市)から「娘夫婦が熱海、箱根方面の旅行を誘ってくれましたので主治医のOKをとり老夫婦はよろこんで連れてもらいました(11月26日)と。

▼斎藤三十四氏(東大阪市)は12月7日の本社句会のロビーで、昨年同様「グループタイ」のチャリティを持た

れ、その売上げを本社発展費として寄付された。なおグループタイは氏の制作になるものである。

▼高杉鬼遊氏(八尾市)から「11月25日の第22回豊中市民川柳大会には生々庵主幹はじめ古方・寿馬・凡九郎・誓二・水客・紫香・鬼遊諸氏ほか出席、天位賞は水客・紫香・寿馬三氏が獲得しました。出席64名



▼前号紹介の新人岩道博友氏は(いわどう)と読む。

#### ▽旅 信△

▼羽原静歩氏(守口市)南紀旅行から「神様の芸術こは橋杭石 湯村温泉から一かにかくに出石の秋の落葉かな」静歩。

▼菊沢小松園氏(大阪市)から「吉田秀哉氏の句集「冬の海」の発刊記念川柳大会に来ています。薫風・静水・政巳・不朽・節夫・岳人諸氏の寄せ書き拝受。白柳氏のお墓参りもされた由。

▼本多柳志氏(大阪市)から「亡母の一周忌法要に松江へ来ています。大山の紅葉や宍道湖の白鳥は大阪では見られません」宍道湖の絵になる朝の漁舟「柳志」。

#### ▽1月の句会△

▼葉の花新年句会は10日(木)夕六時から西郷会館(八尾神社内)近鉄大阪線

八尾下車西南歩約三分一幸福相互銀行裏で開催。会費三百円、兼題及び選者「電車(栗選)・英雄(酔々選)・見物(美幸選)・勝つ(未定)」。席題二題(兼・席とも各五句以内)投句。各一句毎に

適当な句箋に記入、裏面に雅号記名、郵券百円同封、締切は前日到着分限り、投句先〒581八尾市高安町

北二丁目二五大路美幸あて。▼南大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「前向き」/主役/コーナー/アマ。

▼南海川柳部は17日6時から「南海電鉄本社食堂内で開催。題は「情報」/話し合い/活用。

▼東大阪川柳同好会は26日(土)6時から東大阪市中央公民館2F(近鉄永和駅南)題は「神主」/二代目/よろこび/だるま。

#### ★

★編集部から「年末年始の急ぐ原稿は不二田一三夫あてにお送りねがいます。

(〒544 大阪市生野区勝山南一丁目十四番十七号 電話06・718・3218

# 川柳 たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

高山榎時森小古古古岩岩鈴山山  
高上榎時森小古古古岩岩鈴山山  
ほ内内木本本田田谷島宅井広田原橋  
か一房静か笑文寛鈍節蘭不菁一英松鬼  
同子水子子晴子舟夫幸朽居路詩緑焼

# '80 頌春 城北川柳会

川齋野村山坂稲水	本神内山中岡鶴齊山田田橋
	夏
口藤呂島本本葉野	間磯藤田辻田園藤本窪口元
弘三右秀炉喜星	満道ま喜千ふハきテ人な美
十	津す代子みエみミ見こ恵
生四近村齊洗斗弘	子子え子子みエみミ見こ恵

新菅浜山浜玉谷相古桑筒田田岩	虹川柳 倶楽部
岡本下本置口葉谷原井口虹光	
回た久勝義六末ス掬竜虹光	
天子か仁於一美箴星雄子治夫汀男実	

# 川柳化粧櫓の会

## '80 迎春

吉大保大古藤北永松牧市西植
原江西原川後山井浦野川川村
紅秋岳葉奮実越永大秋き三客
月月詩香水男山楽鷹峯ゑ青遊子

# 本社 十二月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

54年度のさよなら句会である、すでに師走へ突入しているが、まだ心齋橋筋はゴツた返えずというところまでは行っていない。きょうは暖冬の句会日和である。

生々庵主幹が大阪日日新聞に大きく出ていた。一日川協の理事長に就任された記事である。新聞紙や電子コピーの刷り物が出席者におわたして共にこれを喜び合った。

場内はやや汗ばむ暖かさだ。まず和歌山の野村太茂津氏の柳話から幕が開く。

「納めの会に私などが」と謙遜されるが、この人の柳話には真実性がこもり、いつも好評である。受けてやろうとする芝居っ気のないのがこの人の魅力である。

お話は、わかやま吟社<sup>カ</sup>の生い立ちからはじまる。最初は四、五人で句会を開いたそうである。現在は六十名を越す地方句会の雄で初代主幹垂井葵水氏の逝去いらい太茂津氏の活躍は関西柳界の話題となっている。一路郎賞、川柳塔賞の後進を育てられた功績も大きい。

月間賞杯は宮西弥生さんに輝く。

— 受付・児島与呂志・塩満 敏  
— 進行・西田柳宏子 — 記録・高杉鬼遊

出席 一敏・与呂志・古方・幸太郎・雅風・滋雀・岳人・花梢・勝美・太茂津・鬼遊・綾女・三十四・薰風・静歩・潮花・紫香・瓢太・柳宏子・勝晴・水客・萬的・右近・生々庵・鎮彦・としよ・英壬子・小雅子・洋敏・喜風・弥生・吸江・形水・度・女・智子・あいき・規不風・好郎・幸生・千万子・百酒・小路・憲祐・一三天・川狂子・翠光・頂留子・柳伸・誓二・凡九郎・涼一・文秋・正剛・君子・栗・酔々・寿子・雀踊子・小松園・庸佑・柳選・葉子。

## 席題「やけくそ」 小出智子選

嘘ついて女がやけくそ見せつける 与呂志  
やけくそになれる余裕を持てる酒 川狂子  
やけくそが母の哀しい眼に出合う 鎮彦  
やけくそになった女の隣だらけ 花梢  
やけくそにみえても心は外れてず 翠光  
実力ともやけくそも見ざる胸を張る 水客  
やけくそになるほど女に惚れていた 雀踊子  
自暴自棄みんな敵に見えてくる 紫香  
やけくそそのラインを妻が引いてくれ 花梢  
どこまでもヤケクソだけがついてくる 花梢  
やけくそその独楽方向を見失う 君子  
やけくそへ鏡もそっぽを向いている 寿子  
カンバンになるまでやけくそ呑んでいる 静歩  
やけくそになって女は堕ちてゆく あいき

やけくそになって思わぬ力知り 柳宏子  
やけくそになって死んだらかと思ひ 雀踊子  
やけくそと言うが計算済みであり 百酒  
やけくそへ殊更寒い師走風 女  
妻のやけくそを冷静に見ています 度

再出発男片道切符買つ 好郎  
やけくそで押したら手応えあつた恋 あいき  
やけくそになつたら椅子が泣くだろう 文秋  
あびるほど呑んでやけくそ泣いている 文壬子  
やけくそになるのを畏が待っている 文秋  
やけくそのようにシングルベルが鳴る 吸江  
やけくその男へライターすつてあげ 吸江  
やけくその哀しい酒を子に見られ 規不風  
やけくそ知らぬ度胸を褒められる 小松園  
やけくそで梅二十食べてみる 醉々  
請求書ひろげやけくそ鼻をかみ 小路  
やけくそと釘の頭は知っている 水客  
やけくそになるとせんさい食べにゆく 岳人  
数の子を買つたらやけくそか聞かれ 右近  
ヤケクソへ九官鳥が呼んでいる 花梢  
やけくそになったら私の負けになる 智子

## 54年度本社句会全出席者

菊沢小松園・桑原喜風・戸田古方・島居百酒・若柳潮花・山本規不風・不二田一三天・橋高薰風・板尾岳人・津守柳伸・香川醇々・金井文秋・藤田頂留子・神谷凡九郎・河井庸佑・高杉鬼遊・小谷葉子・村田瓢太・竹中綾女・西川誓二・江口度・岩本雀踊子・児島与呂志 — 与呂志報

席題「信用」 上田翠光選

信用がないから借金など知らず  
叩いても踏んでくれ信用つぶれない  
妻だけが信じてくれるそれよし  
つましい生活の中にある信用  
信用は親子二代の聴診器  
言い訳へ信用してる目ではない  
信用を落せぬ老舗の餡の艶  
信用のある銀行の茶をよばれ  
信用は担保の額に合うただけ  
信用を叩き込まれて来た船場  
信じて切る妻の倅せ崩すまい  
一石を投げて信用確かめる  
信用はしてまずと権利書預られ  
信用の固まり鳴かず飛ばすで乾からびる  
信用のトビラを金で開けたがり  
信用の重味は裸となつて知る  
信用をさせる明眸皓齒です  
敵の目にその信用にくく見え  
盲判信用してて手で捺され  
担保なぞとんでもないと貸してくれ  
実印にある信用をしかと押す  
信用は古い老舗にある土蔵  
信用をしすぎた穴を覗きこみ  
信用の暖簾は古いままで揺れ  
信用のない父頼りにはされる  
嫁はんが一番信用してくれず  
信用されない方がいいのと少しすね  
信用のないのを借りにきて判り  
信用を積んだ老舗の高いビル

一三天 弥生 好郎 弥生 花梢 文秋 滋雀 雀踊子 潮花 形水 潮花 千万子 庸佑 規不風 小松園 柳伸 柳伸 酔々 酔々 紫女 紫女 潮花 雀踊子 小雅子 滋雀 紫香 鎮彦 鬼遊 萬遊 滋雀 右近

信用が付くまで安い値に耐える  
信用をされて預る鍵のかす  
友達を信用しきつていた誤算  
弁解を乗信しない女好き  
盛運に乗り磨かてゆく信用  
信用がついてさつそく借りに来る  
旅の宿妻の信用裏切れず  
なめらかな舌を信用した不覚  
むほん気を信用しきる眼がせめる  
信用をしていますよと釘を刺し  
神も仏も信用できぬ日の涙  
信用を裏切る声小さくなる

兼題「灯」

神谷凡九郎選

山は夕焼け山小舎に灯がはいる  
万灯のゆらぎの中の父の眼よ  
逢えた日の灯の優しさへ殺意消す  
冬休み学舎は眠る夜警の灯  
裸婦像の過去に灯向けられぬ  
わが家の灯罪の灯向けられぬ  
生きているゆとりロソクまだ点り  
灯にゆらぐ感情線にある乱れ  
何の灯か夜ふけの港に灯が一つ  
一灯の貧者の願いは大それず  
灯を消して愛される価値に散る  
行き暮れて人暮つこい灯が見える  
旅人へ知らない町の灯が点り  
献灯へ無理な願いを一つする  
ネオン街女の闇が胸にある  
仏の灯に触れて小さな虫のいのち  
灯を消して女は明日を考える

文秋 千万子 千万子 千万子 百酒 百酒 洋敏 あいき としてよ 頂留子 百酒 君子 翠光 文敏 文平 寿子 小路 弥雀 滋雀 大茂津 雀踊子 勝晴 百酒 寿子 古方 鬼遊 雀踊子 寿子 小松園 岳人

54年度月間賞杯永久保持者

中島生々庵主幹が獲得

中島生々庵氏と板尾岳人氏が八月句会で  
ならびました。同点の場合は、天位の  
数で上位がきまる規則があります。

一月「丘」	二月「迷路」	三月「水取り」	四月「区切り」	五月「旅」	六月「河内弁」	七月「金婚」	八月「形式」	九月「卜筮」	十月「大声」	十一月「据え置き」	十二月「商店街」
板尾岳人	香川酔々	中島生々庵	岩本雀踊子	中島生々庵	菊沢小松園	板尾岳人	金泉萬葉	那須好石	有信新之助	松原新之助	宮西弥生

有信新之助

ネオンの灯敗北感を沈めよう  
赤い灯を慕い夜空を忘れてた  
灯を消してコトンと眠る馬鹿野郎  
さしむ音過疎地の灯縫う夜汽車  
心の灯点す嘘なら許されよう  
夢消えてもとの受験の灯がにらむ  
履歴書を一枚かくと灯がゆれる  
父の灯が一度は反対もつて来る  
胸張って歩けと雨の灯従っていく  
一応は素通りさせる易者の灯  
もの言わぬ小さな瞳から灯を貰う  
どたん場で消える灯だとは知っている

千万子 文秋 智子 右近 憲祐 岳人 弥生 水客 好郎 幸生 水客

神様が吹けば消えます生命の灯  
灯のゆれるあたりが極楽か  
消えそつてまだかたくなに灯がともり  
ゆきつけば消える灯かとも知れず  
俺だつて孤独サ繁華街の灯り達

兼題「夜警」  
西田 柳宏子 選

兼題「夜警」

西田 柳宏子 選

夜警から掃り待つてる風呂と酒  
人生の付録か夜警の職に就く  
ヒゲのおっさん言われて夜警親しまれ  
事故なしと書いて夜警の顔ゆるみ  
無事な夜が明けて拍手打つ夜警  
前職がわかる夜警の品の良さ  
アベックを照らして夜警うろたえる  
猫抱いて夜警の部屋は冬になる  
放火魔へ夜警の襟を寒く立て  
夜警夫へ寸志と書いて歳の暮れ  
捨て猫へ夜警優しい灯を向ける  
泥棒から見ると夜警のすきだらけ  
嘘のない靴音夜警に冬が来る  
ワイ談も飛び出し夜警無事終る  
風邪引いた夜警はげます空の星  
ビル夜警ところにかける鍵をさもつ  
息抜きも出来ない新米の夜警  
胸張って夜警首相と同じ齡  
星明り巡回時計ののろいこと  
夜警さんうちの社長の元隊長  
往年の闘志夜警の懐古談

夢 醉  
軒太楼  
静 馬  
登美也  
どんたく  
弘 生  
満津子  
文 平  
曲ん手  
富 子  
千代三  
千 子  
萬 的  
好 郎  
綾 女  
滋 雀  
鎮 彦  
太茂津  
敏

チャルメラが夜警の背を抜けてゆく  
懐へ木枯入れてくる夜警  
適当にばけて夜警の親しまれ  
等間隔で夜警と歩く帰り道  
靴音で故郷と話す夜警  
夜警にも経済論に政治論  
ぬくもつたところで夜警交代す  
元旦の夜警はくじを引いて決め  
ふと足を停める夜警にある邪心  
巡查上りの夜警で訊問したくなる  
生真面目な夜警でこいひのむ  
王手飛車かけたら夜警の順が来る  
夜警フツとポツクリ寺のこと思ふ  
捨て夫と共に帰って来た夜警  
今日も無事果し夜警に誇りもつ

小雅子  
英 客  
水 客  
吸 江  
萬 的  
勝 美  
文 秋  
涼 一  
凡 九郎  
君 子  
雀踊子  
一 三夫  
萬 的  
涼 一  
柳 宏子

兼題「口下手」

黒川 紫香 選

口下手の孫血統かも知れず  
口下手の涙は真珠の彩で落ち  
口下手の方が本物売りさばく  
口下手がポツポツ話す人間味  
口下手にくだかれたっているもどかしさ  
栄光の顔ポツリと喋べりだす  
口下手な女が真珠抱いて居る  
口下手が嘘をつけないのでどもり  
下積の心がわかる口下手で  
口下手の真心見付けた鼻の汗  
口下手にギクリと釘をさされたり  
口下手の悔みへ端から助け舟  
口下手の癖に要領よい返事  
口下手で九官鳥は喋べらない

富 子  
千 子  
三 和  
萬 的  
好 郎  
綾 女  
滋 雀  
鎮 彦  
太茂津  
敏

口下手におしゃべりな子が生れけり  
口下手が本当の事に触れてくる  
口下手の書いた便りと思えない  
謝りに来た口下手を叱れない  
口下手にマイク渡すと離さない  
口下手をつくづく思ふ冬の雲  
憎まれもせず口下手の丸い顔  
口下手を助ける妻の如才なし  
一国の総理が何と口下手な  
口下手がいつも笑顔をためている  
口下手が口べたなりの用は足る  
お悔みへ口べたなりの用は足る  
目立たないとこへ口下手席をとり

富 子  
千 子  
三 和  
萬 的  
憲 祐  
醉 々  
右 近  
雀踊子  
柳 伸  
柳 宏子  
古 方  
幸 二  
幸 太郎  
岳 人

正 剛  
凡 九郎  
智 子  
鬼 遊  
形 水  
菜  
翠 光  
柳 宏子  
勝 晴  
花 梢  
太茂津  
涼 一  
鬼 遊

アルバイトの夜警上手に仮寝する  
ビル谷間夜警と知らず身構える  
夜警から団地に出来た顔なじみ

三十四  
幸太郎  
小松園  
君 子  
勝 美

口下手の孫血統かも知れず  
口下手の涙は真珠の彩で落ち  
口下手の方が本物売りさばく  
口下手がポツポツ話す人間味  
口下手にくだかれたっているもどかしさ  
栄光の顔ポツリと喋べりだす  
口下手な女が真珠抱いて居る  
口下手が嘘をつけないのでどもり  
下積の心がわかる口下手で  
口下手の真心見付けた鼻の汗  
口下手にギクリと釘をさされたり  
口下手の悔みへ端から助け舟  
口下手の癖に要領よい返事  
口下手で九官鳥は喋べらない

富 子  
千 子  
三 和  
萬 的  
憲 祐  
醉 々  
右 近  
雀踊子  
柳 伸  
柳 宏子  
古 方  
幸 二  
幸 太郎  
岳 人

口下手におしゃべりな子が生れけり  
口下手が本当の事に触れてくる  
口下手の書いた便りと思えない  
謝りに来た口下手を叱れない  
口下手にマイク渡すと離さない  
口下手をつくづく思ふ冬の雲  
憎まれもせず口下手の丸い顔  
口下手を助ける妻の如才なし  
一国の総理が何と口下手な  
口下手がいつも笑顔をためている  
口下手が口べたなりの用は足る  
お悔みへ口べたなりの用は足る  
目立たないとこへ口下手席をとり

正 剛  
凡 九郎  
智 子  
鬼 遊  
形 水  
菜  
翠 光  
柳 宏子  
勝 晴  
花 梢  
太茂津  
涼 一  
鬼 遊

口下手がナンバーワンを妻にする  
 恋人が出来て口下手しやべり出す  
 口下手のひと言火打石になる  
 口下手は生まれた土地をはなれない  
 口下手に順序よく聞かずに上手  
 口重き人の裏切り聞いている  
 口下手と知っててくれる妻が居る  
 口下手の父はどなって事が済み  
 口下手は口下手なりの話する

兼題「商店街」

大坂形水選

見ただけの客に商店街の媚  
 何を買うあてもないのに暮の街  
 悲痛とや言われ商店街師走  
 スーパーに母屋取られた銀座街  
 省エネの飛沫とともに商店街  
 商店街いのちのつながる道の幅  
 商店街に育ってゼニを賤します  
 税務署が客できている商店街  
 店仕舞いします商店街の隅  
 橋一つ隔てて暇な商店街  
 冬の帽子を一つだけ買う商店街  
 タコ焼屋商店街の隅で生き  
 商店街造花は秋の彩のまま  
 商店街街花でマネキンぬむくなり  
 商店街サクラが蛸焼き買いくる  
 商店街の振り子を止める除夜の鐘  
 税務署に言いたいわんで商店街  
 まねき猫まだ生きている商店街  
 コーヒーの出前商店街の昼下り  
 華やかな心を拾う商店街

一三天  
 英子  
 幸彦  
 文秋  
 水客  
 度女  
 紫香

三和  
 枯梢  
 どんたく  
 静馬  
 軒太楼  
 曲ん手  
 弘生  
 登美也  
 千代三  
 富子  
 幸子  
 優遊  
 鬼遊  
 岳人  
 小雅子  
 度  
 小松園  
 一三天  
 栗  
 寿子

商店街次の売る手を考える  
 カラフルな都市のトンネル商店街  
 目移りの妻に従う商店街  
 スーパーの谷間につかむ商店街  
 客心理巧みにつかむ商店街  
 商店街うちは今だに付けがきく  
 商店街ゆつくり通るニューモード  
 商店街の端はきまつて喫茶店  
 ゲテモノだけ商店街から買って来る  
 ボーナ스에素通りされそな商店街  
 商店街カレライスの匂いする  
 財布の紐しめて商店街歩く  
 商店街の裏へ出てみる旅のこと  
 商店街恵方へ招く夢も売る  
 踊らない客へ笛吹く商店街  
 商店街柱一本のことで採め  
 商店街バーゲンの次は祭りです  
 駅前銀座と呼んでアーケード  
 商店街スリと主婦の目が出合い  
 商店街だんだん地方色消える  
 商店街土地の歴史を塗りかえる  
 十二月商店街の知恵くらべ  
 関白宣言商店街でネギを買う  
 エプロンで気安く行ける商店街  
 蟻の巣が眼に浮く地下のキタミナミ  
 女手で商店街のボスである  
 スーパーへ巻き返しかける商店街

(河井庸佑整理)

庸佑  
 右近  
 太茂津  
 花梢  
 庸佑  
 誓二  
 藤二  
 好郎  
 萬的  
 静歩  
 吸江  
 岳人  
 水客  
 滋雀  
 一三天  
 小松園  
 失名  
 小路  
 生々庵  
 柳宏子  
 花梢  
 翠光  
 凉一  
 誓二  
 憲祐  
 弥生  
 形水

▼本年もよろしくお願ひ申しあげます

★

句会部一同

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円送料共

序文・中島生々庵

選句・菊沢小松園

編集・若本多久志

本社でお取り次ぎいたします。

発行者 若本多久志

これが川柳の真髄！

川柳全集② 橘高薫風編

「麻生路郎」

定価千円  
 送料160円

このたびは社団法人日本図書館協会の第一四二五回の選定図書に決定されました。

島居百酒著

比島戦線従軍回顧録

「白い歯」 好評発売中

定価千五百円・送料百六十円

発行所(右二著とも) 東京都世田谷区三軒

茶屋二の十九・振替東京九一三一九一

構造社出版株式会社



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳たけはら

森井 静居報

娘がほめてくれた私の綴り方  
流した汗を野のもの裏切らず  
育児書の重さは母という重さ  
愛憎を占う岐路にきるカード  
悔やんではおれない明日が待っている  
おもいきりあくびができる夫婦きり  
目をふせたまま世渡りができますか  
いぶし銀鋭利な口と矢はもたず  
そつと手を伸ばせばつかめそつと恋  
天を肩に坐仏の大いなる御胸  
ランランのママにはなれず上野の灯  
きな臭いニュースへ憲法員となる  
プランコと静かにゆれて職がない  
友達も遊んでいない夏休み  
したたかな意地を財産ともおもひ  
日の丸を見てと還らぬ子が浮かぶ  
秋風を感じて洗濯物を干す  
人形の貌には殺気などないぞ  
地にかえるまでが長うて恥多く  
上役がさん付けて呼ぶ年齢になり

水子 幸子 蘭子 房子 静居報 純舟 寛子 笑子 洋之祐 靖子 不朽 敬子 節夫 小四紀 鬼焼 菁居 かつ美 千代美 秀路 英詩

かき氷ステキな夏にしてくれる  
川柳わかやま 堀端 中一愛  
憎い掌ががっちり米粒の重み知る 三男報  
七転び味方に妻が居てくれる 武雄  
浮気したよと妻に一度言ってみる 雀踊子  
がっちりと心を掴んでまだ触れず 誠一  
がっかりと貯めて使い方知らず 英子  
奥深く小さい浮気たたま込む 光代  
空想の何処かが浮気の虫が鳴く 式  
計算に弱くてもがっちりためている 佐代子  
がっかりと握手ライバル火花散る 柳宏子  
罪のない浮気心で若く居る 紀久子  
浮気などともんでもないと本気でず としよ  
人生の道草と云う浮気 凡九郎  
人情のかよう里から米とどく 武太  
米一粒笑えぬ戦時を生きた腹 裕美  
神々の浮気大和の国を産む 三男  
米をとどくその日の音が有り 千寿子  
がっかりと抱かれて骨も砕けそう 頼次  
天職の汗です米価にもせず 正博  
薄くけを握れば亡母がよみがえる 公子  
川柳化粧槽 植村客遊子報

害鳥にされているとは知らず鳩 秋月  
門限を聞いて温泉宿を出る 秋月  
文鳥もあくび奥椋昼寝中 岳詩  
夕日色く茜の空は弥陀に似て 紅葉香  
爪の色今朝の機嫌がよくわかり 奮水  
二六月爪をせんじて吞めと父 実男  
花鉄素直に動くよい話 越山  
八吠鳥鳥の身なれど功一級 永楽

ふすま越爪ひきの音に口すさむ  
子つばめが夫婦げんかを覗き込み  
お向えが新婚さんで気がつかれ  
山の娘も赤い爪して里帰り  
出陣の車窓を偲び缶ビール  
どんぐり川柳会 谷垣  
出し抜けに得意の漢字尋ねられ  
父の真似得意で父にかなわぬ  
控え目の隅が疑い深くする  
嫁はんは釘の頭も叩かれる  
控え目の鈴の頭も叩かれる  
控え目にすると女に逃げられる  
控え目にしてたら油揚げさらわれた  
控え目といういじらしいしが好き  
控え目の仕草に恋を抱いている  
中流でかやく御飯は得意なり  
お見合へ控え目すぎてまもらず  
控え目が承知をしないのどばとけ  
得意の絶頂 菊を写している  
控え目に米を作れという達し  
吸入器見ている方も口を明け  
なつかしい少年の日のパチさばき  
ああ軍歌亡父の写真が得意そう  
ちぐはぐに見える夫婦にある呼吸  
乳房吸うそこにふるさとある川口  
城北川柳会 弘生報

大鷹 秋峰 秋山 三青 客遊子 史好報 儀一 醉々 弥生 鬼遊 鎮彦 雅風 瓢太 好郎 岳人 勝美 薰風 小松園 真砂 醉夢 吸江 吐来 史好 弘生報 テルミ 茂樹 左春 炉齊 三十四

薄情な文字 便箋の走り書き

便箋に向って昔おもい出し

若き日のラブレターをそつと読み

国訛り便箋せましと踊つてゐる

便箋の模様も楽し高校生

秋の夜便箋足らなくなりました

便箋の反古ばかりなり片思い

便箋を選ぶ 少女に還るなり

恋文は便箋にまで気を使い

便箋に叱られるほど書き損じ

便箋の楷書の主は元判事

口下手な恋はレターでよく喋り

便箋がすぐそこにある秋の夜

秋の夜手紙を書けと虫が鳴く

川柳大阪 兎島与呂志報

土依きわ命が押さえられていた手術

ホルノ館出て八月の直射なり

さて誰と二枚もらつた入場券

あとのない土依にも似て貯金帳

小包に故郷の匂い好きなき栗

定期券手品の様に見るラッシユ

青年の肩に日本の夢があり

よその子を叱つた後の気が晴れず

世話好きがいつも唇をもち歩く

信頼がないのか拍手少なすぎ

ポケットに洗濯された回数券

子の夢を叶えぬけがらの夫婦です

善人の苦勞を悪人フタを夫です

ほとぼりがさめれば省エネもつ忘れ

血の汗も明日の舞台を担う夢

星斗

寿幸

ハルエ

なりこ

千子

満津子

右近

ふみ

午郎

美恵

弘

としよ

道子

ますえ

雨久路

笑風

弘生

六童子

三十四

胡蝶

敏

本蔭棒

誓二

喜醉

比呂志

秀峰

雅巢

希久志

洛醉

黒い程鼻高々の新学期

嫉妬して愛の深さを確める

忙しい男は不幸を忘れてる

南大阪川柳会

中川

明暗の記事が眼につく敬老日

明暗の岐路一瞬の勇み足

鼻の差で勝つた負けたの泣き笑い

引締めた手綱はどこでゆるめよか

引きしめて暮しのゆとり考える

ピンチにも平気な夫へ歩を合せ

平気だヨと云うからスツカリ嘘になる

平気平気ビジネスですと女脱ぎ

ゴミの山人の心も捨ててある

はきだめのゴミの中から詩を拾う

野良犬の恋ゴミ箱をゆずり合う

親の目にゴミだが子供には宝

ゴミ箱のゴミも貧富の差をみせる

客の子を叱れも活気はめておく

活気のない町を死の海と囲む

カーテンの裾を濡らして逃げた雨

カーテンを開いて朝を深呼吸

男かな女かなカーテンゆれている

鉄面皮恥かかされた顔もせず

菜の花句会 高杉

本を読む灯も紅い灯も夜をともし

野ざらしの壁画の鼻がこゆそつな

雪しんしんふたりの蟹が煮えつまる

夜やから生き返つてはる人が居る

化学分析のようにはゆかぬ姑の言葉

九平

君枝

与呂志

滋雀報

久子

喜風

滋雀

柳宏子

節子

千代三

好郎

凡九郎

誓二

勝美

あいき

柳伸

蘭

弘生

英子

君子

憲祐

頂留子

恒明

文秋

重善

柳選

柳伸

凡九郎

道子

栗

姑が嫁をほめてる持参金  
 政党を分析したら何が出る  
 弱い男がいつかは落ちる蟹の穴  
 姑と離れてバートの皿洗う  
 ガスの火で焼かれて松茸むくれだす  
 分析はよそう蛙の子は蛙  
 蟹の爪冬至の空へ向けたまま  
 ささやかな俸せを煮るガスコンロ  
 水俣の痛みを知らぬ分析表  
 逃げ込める距離を保ってカニ散歩  
 こんな夜いつかもあったなと思う  
 キリストも釈迦も壁面に生きてゐる  
 髪染める姑の若さに負けまいぞ  
 蟹の意地海草抱いたまま上がり  
**駒つなぎ川柳会**

鶴声 綾女 酔々 幸生 頂留子 岳人 糸葉 鬼遊 柳宏子 雀踊子 みずほ 小鎮彦 小松園 里 小路報 勝美 柳選 雅風 宏子 鎮彦 規不風 育園 恭太 小路 柳宏子 鬼遊 岳人 雀踊子 みずほ 翠公

花活けて少し落ち着く胸さわぎ  
 柿の木とわかれてからの他国者  
 黒百合のように喪服の姉目立つ  
 薬玉が割れるように式服パツとなり  
**うみなり川柳会** 小林由多香報  
 残り火の火種が男の向を替へ  
 消すことの出来ぬ保証の印が泣き  
 再会へ恋の火種は消えていた  
 火を消して闇に浮く夢明日の夢  
 消しゴムの細る運命に甘んじ  
 秘めている涙はまつ毛だけが知り  
 当然にある毛でめめる芸術論  
 娘が編んでくれる毛糸に両手貸す  
 起重機に吊り上げられた雲の峰  
 反骨がいま高声で抗議する  
 ほんやりと妻が坐っている不安  
 焦点がまだまとまらぬ朝の音  
 記念する顔を写真屋まだつつき  
 一区切りつけた余生を塗り直し  
 詩集一区切り落葉の落ちる音  
 区切りつけエプロン捨てた妻を追  
 人生の区切りへきっぱり印を押す  
 独房の窓を区切った秋深い  
 川汚れ市政の貧しさあざ笑い  
 裏街のドブへ市政の陽がうすい  
**川柳塔まつえ句会** 恒松 町紅報  
 サイコロを振って効用考える  
 効用は確か横には振らぬ首  
 それごらん逆のコースはきつい坂  
 逆コースから救援に行くか決め  
 逆コースたどり俸せつかんでる

桐下 信治 千代三 小松園 帆雀 富美湖 佳女 貞山 由多香 独歩 忠良 無人生 夕路 天涯 熊生 一保 公乃 華乃 大漁 とし江 洋々 花子 單車 単車 叮紅報 みる 三和 耕草 愚童

文明の世に手作りをもてはやし  
 口べたの一言胸につきささり  
 炎えつきるまで世間体へ縛られる  
 逆コースたどる人生だつてある  
 効用は定かでないが常備薬  
 メッキした女にもある世間体  
 差し押えされては困る世間体  
**虹川柳俱樂部** 新岡回天子報  
 構えたるカメラに噴水息をとめ  
 角皮を下げて年賀の飲み仲間  
 が栗がはじけて豊かな肌をみせ  
 元日は御縁起だけに明け暮れる  
 自信のない時には法螺も吹いてみる  
 航空券届いて掃蕩の休暇とる  
 本尊を拝めぬ人出の観光寺  
 暴落を知らず蜜柑の山みのある  
 逆わず筏は水竿任せなり  
 大掃除さて捨てる物なき我が世帯  
**東大阪川柳同好会** 三十四報  
 誰の血を受けたか一人変り種  
 変り種だよ一生独身で行くと言う  
 逆立ちがうまい芸者の変り種  
 菊ならばカップねらえる変り種  
 手こずった子を変り種とあきらめる  
 逸話にも味が豊かな変り種  
 昔の角度母は苦勞の過去を持ち  
 角度変え又撮っている嬉しい日  
 角度変えたら意見が合ってきた  
 菜屋でスッポンと対面し  
 人間の方がきつというスッポン  
 敵意持つスッポン首を引こめぬ

寿美子 鶴丸 狐呂二 登美也 通児 叮紅 舞吉 新一 義美 久仁於 一竿 小鈴 畑中 掬治 虹汀 回天子 長京 三十四 湖風 綾女 文秋 喜風 誓山人 弥生 金福 雀踊子

スッポンの鍋囲んで悪縁まだつづく  
スッポンの生血もらつてもちなおい  
スッポンは夢より一度賭けてみる  
スッポンへ夢も一度賭けてみる  
鼻血の責任もスッポン持たされる  
匍い上る力をスッポンに教えられ

南海電鉄川柳部(大阪市)辻

悪乗りにもライバルがあり上は上  
悪乗りの方が主役にされていた

団体のルーツへ悪乗りする仲間  
儲けとはさびし悪乗りまでもさせ

悪乗りでたんまり腹もふくらまし  
悪乗りの烙印押されるふざけ者

四月馬鹿悪乗りされるからの仲  
酔いがさせた悪乗りを苦笑い

小倅れのくせに大人の話食い  
悪乗りの程度もA・B・Cがある

悪乗りも年の若さでゆるされて  
ひらめきが若い二人を結ばせる

オースケール川柳会 大坂

背伸びなどせず年定年迎えてる  
つり銭でスリルを買ったバチンコ屋

背伸びして香具師の口上聞いており  
網直し明日の獲物を信じてる

葡萄狩りパレーのポーズで採る女房  
落葉はく熊手持つ手に秋の冷え

背伸びした手から宝物落ちる  
省エネにホウキと宝箱が出番待つ

背伸びしてくちづけをするハイヒール  
婚約も式もとはして同棲中

眼半分あけてスリルを期待する

頂留子  
喜一郎  
利吉  
柳吉  
恒明  
小松園  
圭水報  
摩太郎  
圭水  
柳伸  
宏  
勝美  
与一  
雅風  
誓二  
川狂子  
千代三  
綾志子  
菱女  
形水報  
秀川  
信楽  
一扇  
登  
雅洋  
千夢  
一彦  
貞念  
垂成  
栄  
光夫

背伸びして知ろうとせせず聞き流し  
七光りだけが目立ったご婚約  
婚約をしてから嘘をつきはじめる  
やつと婚約ダルマに片目だけいれる  
背伸びした分だけロロンのし掛る  
背伸びする男についてまわる嘘  
老の背を伸しにスック靴を履く  
羽んでいる女へ婚約届かない  
背伸びして店をひろげてけつまずき  
背伸びしてもキリン母国が遠すぎる

川柳後楽(岡山市) 井上柳五郎報

鍵っ子に母親ついつい甘くなり  
鍵っ子に流れる雲が話しかけ

鍵っ子が母にせがんだ二重丸  
鍵っ子の部屋におびしい灯がともり

門前に立つ鍵っ子の長い影  
鍵っ子は自分とたたかう綴り方

決心がポストの前を往き来する  
ストライキポストが便秘しています

投函のポストの音を確かめる  
書残したポストで口惜しがり

出稼ぎのポストへ安らぎの嘘を入れ  
口癖のまだかまだかに急がされ

また小言口癖ぐらいに聞いておき  
口癖のわたしわたしが飛んで出る

三回忌祖母の口癖だけが生き  
万歳も新婚旅行は一声で

万歳を味方の顔で三回し  
万歳を横目で眺めたひとり旅

万歳が一番好きない男

聖地  
有一  
野生  
度  
みどり  
博泉  
形水  
弥生  
入仙  
好郎  
ひろ報  
五郎

柳五郎  
梁太  
照路  
たけ志  
草風  
胡風  
久米雄  
博基  
昌吾  
秋月  
宏大  
正道  
夏平  
夏彦  
博友  
九坡

京都塔の会

松川 杜的報

言いつてから腹が立つて来て  
飲んでるだけで親子にある対話  
縋せては溺れるのでは無いこんな色の服  
流れには溺れてならぬパンを買って  
赤蜻蛉いつも五六歩先を行く  
やどかりを売る店先を借る夜店  
袖たたみして幸せうすき夏羽織  
底もなく深く澄みたる秋の空  
腹の底見えて対話を中止する  
底辺の暮らして虹が美しい  
底の底湯の花うさく湯治宿  
集金のお世辞にされたバラの色  
夕立のしぶきのなかを夏の風  
旧姓のまま通帳も嫁にゆき

川柳ささやま 河原みのる報

あの仁が千鳥足とはめずらしい

近郊

美穂  
芳子  
杜的  
明代  
紫香  
潮花  
水客  
弘三  
笛珠  
誠史  
和友  
白溪子  
求芽  
飛鳥

河野君子選

深刻な話男は弱くなる  
楢山へ橋遠くなる近くなる  
砂丘有情足跡まろくまろく見せ  
盗み撮りされたほんまの俺の顔  
よろこびを手にするまでの長い道  
嫌いな人へ行かねばならぬ道もある  
旗色を読む尻押もいるだろう  
勉強をせよとは無駄なことを言い  
も一つの野心へ星が赤く燃え  
人並みのくらしへ齢を取り過ぎた

好郎  
幸  
不朽  
小路  
英子  
田鶴子  
雀踊子  
智子  
小松園

小松園

近郊

河野君子選

近郊

近郊

近郊

近郊

めずらしい強気の女涙見せ

めずらしいサービス何かありそうな

ほんのりと酔えるワインの丸が好き

老夫婦のまわりで秋が丸くなり

嘘でしよう噂を妻が丸く責め

指で丸露地の貸借笑うてすみ

思いやり素直に受けて今日を生き

思いやり社長は中座して帰る

思い立ちがそうさせている罪哀し

大國のゆとり難民とり上げる

土つけたままで珍客握手され

特別の車も同じ轍を踏み

父として特別席をあてがわれ

特別の優待券で後がもめ

三井ヶ丘川柳会

怒りみな消えて冷えゆく月の面

生きがい仕事だけだと嘘を言い

生きがい親を養ない子を育て

アルバムが穢れた自分で声ひそめ

生き甲斐を子等に聞かれてふと惑う

子だくさん生きがいなどは言うとな

鏡台へ女の朝が変化する

敬老会母もやっぱり化粧した

若き日の写真の中に居る女

何時までも亡父睨みの効く写真

歩道橋乾いた世路へ叙む音

生きがい胸に輝く叙む音

三角の目になっていく月見酒

生きがいの子らは菓立って核家族

青春に嘘はなかつた写真集

団地から離れて月見する散歩

靖子

素水

可平

可住

ゆう也

百合子

つや子

文平

みのる

越山

宇山

エキオ

八陣

一好

博泉報

高田

一菁

勝美

柳步

洋茶

江留美

よしひろ

晴風

野生

琴音

てまり

光夫

亜也子

英王子

一念

博泉

人類愛に燃えて顕微鏡覗く

悪友という生きがい(二)、三人

いつからか父母に見えない写真抱き

コオロギの合唱秋をぶちこわす

カセットが生き甲斐という玩具

枝豆の皮たまりだす聞き上手

生き甲斐を知ってる靴はようちびる

上をむいたら出ていたそんな月見

大田川柳会

式次第進んで児童あくびする

竣工式花輪の数で顔が知れ

式服に芽出度い酒のしみの跡

身仕度はトランク一つ家出の娘

出産の仕度うぶ湯がもう滾る

冬仕度母が慌てた今朝の冷え

格式が派手な仕度を見せたがり

省エネの工夫出し合い冬仕度

天気図へ雨具思案の旅仕度

育児本読んで仕度へ月満つる

客送り口下手はつと安堵する

時の人舞台上で口下手真似られる

訥弁の説明だから信用し

口下手のペン先見事人を斬る

口下手な夫に多弁な妻が居る

転勤の土地に親しむ暇がない

啄木の詩に親しむ病中記

善後策親しむ顔の知恵を借り

乳離れしてやれやれへまた孕み

省エネが親しむ灯火の中を裂き

嫁がせてやれやれ寂しい老二人

和歌山七面句会

弘生

三千子

右近

あいき

亜純

度

柳宏子

凡九郎

藤田軒太

煩悩児

ぬるを

幸一

代仕男

雷音坊

秀子

美浪

三三男

可保留

九二老

シマコ

ゆう子

孝太郎

みのる

軒太楼

愚童

登美也

早笛

独仙

立雲

夢酔

三幸報

市場没食子・カネ女共著 (千円下とも)

傘寿・金婚『夫婦』刊行句会

記念句集『夫婦』金属会館

昭和55年3月7日(金) 六時から

柳話

謝選

兼題

席題

会費

千円(句集皇)

主催

川柳塔社

靴音に寒い影曳くチャブリン

睡眠薬日の出の頃に効いてくる

正直に身体曲れば影も曲げ

酔眼へ表札他人の顔をする

陰口を聞いてしまったわだかまり

表札の姓名な同じ映の村

肝臓の薬飲みつつ酒を飲み

薬より孫の笑顔の方が効き

戦争の影鮮かに原爆忌

表札のない隠居所の百日紅

影間の薬はいつも忘れがち

影と影からみて終るラブシーン

秋深く人影まばら天守閣

旅行けば靴に薬持ちつつつけ

表札と結婚したよな暮しぶり

ロッキングチェアで思案の影ゆれる

其夕

智水庵

秀雄

幸

フクコ

周穂

見

宣子

晶子

わか

勇次

淳次

世津

光治

知也

富子



# 本社新年句会

日時 一月七日(月) 午後六時  
会場 金属会館

兼題  
柳話  
電話 271-3935  
☆短冊交換会(一人三点以内)  
☆54年度月間賞杯授与と全出席者表彰  
☆4年度月間賞杯授与と全出席者表彰

席題  
二題 当日発表  
三百円

各題三句以内厳守

川柳塔 中島生々庵  
高杉好遊選  
谷西弥生選  
宮史好選  
高鬼遊選  
村好郎選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鯉谷中之町20

## 川柳塔社

2月の兼題 「巢角」 「眼力卵」

## 本社句会

2月7日(木) 6時 から  
3月7日(金) 6時 //  
4月7日(月) 6時 //  
5月7日(水) 6時 //  
6月6日(金) 6時 //

## 常任理事会

2月4日(月) 5時 から  
3月3日(月) 5時 //  
4月3日(木) 5時 //  
5月1日(木) 5時 //  
6月2日(月) 5時 //

☆誌代が切れると送本を中止します

## 募集

### 三月号発表表 (1月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選  
水煙抄(10句) 川村 好郎 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「服飾」 梅 みどり 選  
「保陰」 藤村メ 女 選  
「しつけ糸」 高橋 操子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 四月号発表表 (2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選  
水煙抄(10句) 菊沢 小松園 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫風 選  
課題吟(各題5句以内)

「新顔」 西村 早苗 選  
「スピーチ」 上田 翠光 選  
「良心」 吉田 圭井堂 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

2月の常任理事会は4日5時から

定価 四百円(送料29円)  
半年分 二千五百円(送料共)  
一年分 四千八百円(送料共)  
昭和五十四年十二月二十五日印刷  
昭和五十五年一月一日発行

大阪市南区鯉谷中之町二〇番地  
編集兼 中島 蓬太郎  
発行人 藤原 童心社  
印刷所 藤原 童心社

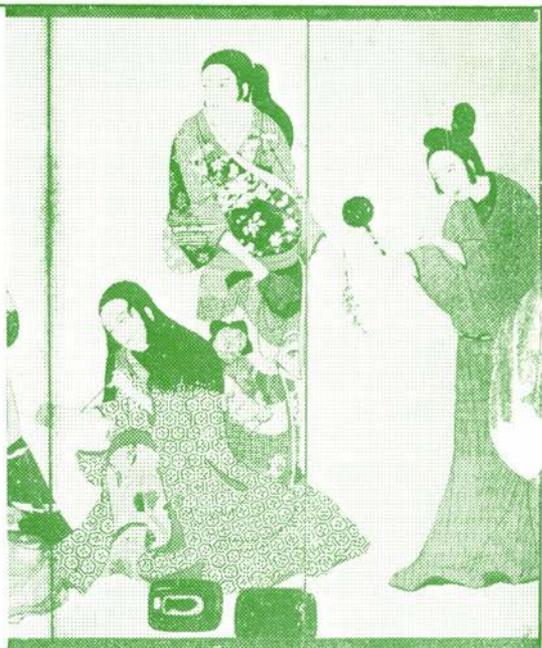
〒542 大阪市南区鯉谷中之町二〇番地  
発行所 川柳塔社  
電話 大阪・二七一三九八五番  
振替口座 大阪・三三三六八番  
普通預金口座番号・一〇二七八三

# 美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の  
静かな環境にある大和文華館  
は 日本建築の特色に近代美  
を生かした美術の殿堂です  
収蔵品も日本・中国を中心に  
国宝・重要文化財を含む 有  
数のコレクションです  
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

## 近鉄



・ペンペン草・

55・関・庚申

★あけましておめでと  
うございます。

★今年も頑張りますか  
らよろしくお願ひ申し  
あげます。

大阪ことは事典「牧  
村史陽編」に故梅里さ  
んの代表句が載る

★編集部の高杉鬼遊さ  
んから「四一五〇ペー  
ジに梅里さんの『命ま  
で賭けた女はたっか  
い』のテはたっか

▼葉子コーナー

▼お正月のお重詰め  
は、昔はごまめに数  
の子、牛蒡に棒鮎と  
決っていました。が、  
この頃は洋風になり  
既製のものをデパレ  
ト等で買う方が多い  
ようです。

▼江戸時代には「元  
日門戸を掩(おお)  
う」といって、ミカ日  
は「福の神」が外に  
出ぬように外出しな  
かったといわれています。

▼お正月の風情が次  
第になくなるのは寂  
しいことです。

一字で気持ちをさうまく  
説明している。ことに  
「これかいな」とやわ  
らかく受けけているの  
で、それが一層よく利  
の欄で引用されており  
ます」とあった。

★「牧村史陽先生に、雑  
誌『漫才』の編集集中  
一度ご執筆いただいたこ  
う思いながら機会をう  
しなげました。

★生々庵先生が、ぼく  
に「キミと同じような  
生活をしている人に、  
牧村史陽さんがある」  
とおっしゃったことが  
ある。くわしいことは  
お伺いしなかったが、  
牧村先生にどこか似た  
ところがあつたとしたら  
光栄である。

★川村好郎氏が喜寿を  
記念して「履歴」とい  
う良い句集を出された  
ところ一度書いたこと  
があるが、路郎先生は  
好郎氏と梅里氏の句集  
を企画され、「兄弟一  
」という題まで出来て  
行かされたいたら「命  
まで賭けた女で飾ら  
れたにちがいない」  
★この句集「履歴」は  
好郎氏のお弟子さんで

ある谷垣史好・笠原敬  
江・高杉鬼遊・香川酔  
々四氏が共選し、編集  
し、装画は村田彌太氏  
という、著者がい  
「全く肉輪だけで」出  
来上がった師弟愛の結  
晶である。題字は好郎  
氏の次女今村恵美さ  
ん。まことに心あたた  
まる句集である。

★好郎氏のお人柄がし  
のぼれる「履歴」だ  
うかつにも「履歴」だ  
だくまで知らなかった  
ので本誌上で予告もし  
なかつた。刊行記念句  
会も派手にしてくれ  
るなどのことだったが、  
お弟子さんも多くいる  
ことでは、「お任せに  
」になっては、一応ご  
承諾を得た裏はなしも  
あつた。

★一月七日に川村好郎  
氏の「履歴」三月七日  
には市場没食子・市場  
カナ女さんの「夫婦」  
六月六日に村田彌太氏  
の「紅華」と、今年  
は句集刊行記念句会が三  
つある。正月そうそう  
からこのような後記の  
書けることはなんとし  
てもありがたいこと  
である。

（不二田一三夫）

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

好郎氏のお弟子さんで

# 謹賀新年

電波新聞社

東京本社

東京都品川区五反田三丁目二二一二五

大阪本社

大阪市北区中之島三丁目一四

(朝日新聞ビル内)

## 投稿欄案内

川柳 選者 橘 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者 小 寺 正 三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者 佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

※俳句・俳句には掲載紙をお送り致します

《投稿規定》

《投稿先》

〒100 大阪市北区中之島三 二一四

電波新聞大阪本社学芸部あて  
(朝日新聞ビル内)  
(川柳・俳句・短歌を明示)

昭和四十一年一月九日第...種郵便物認可  
昭和五十四年七月二十五日印  
昭和五十五年一月一日発行(毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻 六三三号

川柳塔

一月号

# 生酏辛口

きもとからくち

料理がいきる  
辛口の本格派



# 菊正宗



神戸・灘  
菊正宗酒造株式会社

定価 四百円(送料・本方に限り三十三円)